齋藤茂吉著

歌集

寒雲

古今書院刊行

歌集 寒雲

齋藤茂吉

寒雲目次

昭和十二年

昭和十三年

昭和十四年

昭和十二年

豐年

高山も低山も皆白たへの雪にうづもれて籠る
家村

豐年のはげみに集ふうからやから朝早くより
爲事初せり

高山の雪を滑りに行くをとめ楽しき顔をしたるものかも

ひとつ國興る力のみなぎりに死ぬるいのちも和にあらめや

みちのくの藏王の山に雪ふりてすでに寒しと家ごもるらむ

新年

あかつきのまだ暗きより目さめゐて心(こころ)樂(たの)しく
おもほゆるかも

ひと年(とせ)のはじめのあかり差(さ)しそむるそがひの
山に群(むら)鳥(どり)のこゑ

わが部屋を片付くるひまも無かりしとわが獨りごとおのれ聞きつつ

一年のはじめといへば迫りくるものおもひもなく寂かにあらな

わが庭に枯れ伏しにける羊歯の葉にさ夜中に降る霜いたいたし

むらぎもの心淸（さや）けくなるころの老（おい）に入りつつもの食はむとす

おほいなる富（とみ）をいだきて死ぬこともひと代（よ）の莊嚴（さうごん）といふべかりける

子らがためスヰトポテト買ひ持ちて暫（しば）し銀座を歩きつつ居り

七階の高きにのぼり吾は來て紅くにほへる梅見て降る

うづだかく一樹のもとにたまりたる落葉をこめて雪は降るらし

わたつみの荒れ居るさまを空とほくうつしし寫眞愛でて離さず

一月雜歌

一ところ杉の低木がかたまりて落葉し居るを見ながらに來し　一日神苑

少し前參道とほり淺草の人・ごみのなかに時移りゆく　一日

街上の反吐を幾つか避けながら歩けるわれは
北へ向きつつ　二日

一月の二日になれば脱却の安けさにゐて街を
歩けり　二日

くらやみに眼ひらきて浮びくるはかなき事も
わが命とぞおもふ　三日

街道を驅歩する歩兵一隊が横に折れたりその
最後の兵　七日

ものなべて彼岸になりし如ければ如何なる時
にわれは笑まむか　八日

女身より光放つとおもはしむこの看相を女に
聽かむ　八日禁男館オーブリ女史

おほどかに遠くより見れば冬枯れし箱根の山
も吾を慰む　　九日選歌行

二日まへみだれ降りたるこの雪は谷合の石に
消えあへなくに

冬がれし木立の中はものも居ず幽けくもある
か落葉うごく音

梅

近よりて笑ひせしむることなかれ白梅の園に
をとめひとり立つ

くれなゐににほへる梅が日もすがら我が傍に
あり樂しくもあるか

梅が香のただよふ闇にひとりのみ吾（われ）來れりや
獨りにやはあらぬ

戀ひおもふをとめのごとくふふめりしくれな
ゐの梅をいかにかもせむ

きはまりて障（さや）らふものもなかりけり梅（うめ）が香（か）た
かき園のうへの月

春寒

十日經し春のはだれは小公園に白き巖のごとく殘りぬ

北とほく眞澄がありて冬のくもり遍ねからざる午後になりたり

算術を學びていまだ起きゐたる子よりも先に
われいねむとす

朝刊の新聞を見てあわただしく蘆原金次郎を
悲しむ一時

入りかはり立ちかはりつつ諸人は誇大妄想を
なぐさみにけり

山峡を導きし鳶黄金いろの光放てる時しおも
ほゆ
むらぎもの心にひそむ悲しみを發きながらに
遊ぶといふや

庭前

まぼろしに現(うつつ)まじはり蕗(ふき)の薹(たう)萌ゆべくなりぬ
狹き庭のうへ

枯れ伏しし蕗にまぢかき虎耳草(ゆきのした)ひかりを浴み
て冬越えむとす

冬がれて伏しみだれ居る山羊齒(やましだ)を切りとりて
棄つ春は來むかふ

歌會の歌

節　忌　二月十四日

きさらぎの半(なか)ばを過ぎて降る雨を雪にならむと語りつつ居り

赤彦忌　三月二十一日

一とせに一たび君を偲ぶにも思ひつむることなくなりにけり

近作十首

けさの朝け起きいで來れば山羊齒（やましだ）に萌ゆらむ
とする青（あを）のかたまり

夜（よる）の霜（しも）降りたるあとの無くなりて土やうやく
に定まるらしも

リユクルゴスの回帰讃ふるこころにもなり得
ず吾は子にむかひ居り

きさらぎの二日の月をふりさけて戀しき眉を
おもふ何故

ヴェネチアに吾の見たりし聖き眉おもふも悲
しいまの現に

石垣にもたれて暫し戰を落ちのびて來しおも
ひのごとし

鼠の巣片づけながらいふこゝろは「ああそれなの
にそれなのにねえ」

溫泉を越えて島原にくだりゆく友おもひつつ
晝床に居り

吾のなかに溜(た)まりし滓(おり)がいかならむ形(かたち)となりていで來るらむか

業餘

つづけざまに巖(いは)爆破する映畫見て結論ひとつ.得るいとまなし

岡麓先生還暦賀歌

しづかにも老いたまひたる岡大人（をかのうし）に祝酒（ほぎさけ）ささぐわれも飲ままく

おもふどち今日はあふがむ歌聖（うたのひじり）書聖（てしのひじり）といませる君を

長生のさきがけしたまふ岡大人の後こぞりて我等も行かむ

さくら花咲きのさかりの木のもとに大人ともろともにゆたけくしあらな

蘭のはなにほひそめたるかたはらに翁さびつつしづまりたまふ

餘響

子ら三人臥處のなかに入るまでは私事のごとくおもほゆ

しばらくの餘響を吾は感じ居りヒンデンブルク元帥のころ

洋食をこのごろ食ひてあぶらの、香しみこみし
ごとおもふも寂し

たのまれし必要ありて今日一日性欲の書讀む
遠き世界の如く

われ醫となりて親しみたりし蘆原も身まかり
ぬればあはれひそけし

岡麓先生還暦賀

さやかなる御生（みいのち）ともあふぐべく先づこの老（おい）に入りたまひけり

四月一日、神風號

一米（メートル）あまり隔てて見つつをるこの飛行機は明（あ）日（す）飛びゆかむ

流感

一冬（ひとふゆ）を過ぎむとすればあやしくも風邪（ふうじや）にかかり悲しむ吾は

窓の戸の白々あけに處々の肉いたみながらに
熱おちにけり

神風號倫敦著

風邪の熱たかくのぼりて居りし夜神風號は飛
行を遂げぬ

羊歯秀づ

青々とすきとほるまで茂りたる羊歯の荒まむ
ことをおもはず

みづからは風邪のなごりのたゆくして羊歯む
らのへに一日を惜しむ

涓滴

寒きより暖きに移りゆくころほひ氣溫の變動にいたく影響せらるるまでになりし明暮

さだかならぬ希望（のぞみ）に似たるおもひにて音（おと）の間
こゆるあけがたの雨

をさなごの筥を開くれば僅かなる追儺の豆がしまひありたり

極まりは一つになりぬこの吾を死骸とおもはば安らけくこそ

少年ひとり間道を走るところありタンネンベルク戰のはじめのころに

乳(ちち)の中になかば沈みしくれなゐの苺を見つつ
食はむとぞする

冴えかへる幾(いく)日(ひ)か過ぎてなまぬるき氣(き)溫(をん)にも
われは弱くなりたり

羊(し)齒(だ)の芽に光のさすは午後二時を既に過ぎつ
つはかなくおもふ

一冬は今ぞ過ぎなむわが側の陶の火鉢に灰たまりたる

マドリッドに迫れる兵も濫りなる戰死を避けて動くことなし

飛行場のあらゆるさまを見しむるを吝のためと何人か言ふ

春彼岸の寒き一日をとほく行く者のごとくに
衢を徒歩す

松の果があまた落ちたり神森の手入とどきし
ゆふくらがりに

穴のなかに入りゆきたしといくばくの人は現
に恥ぢにけるらし

人々は五分經たぬに目のまへの戀にこがるる寫實をわらふ

私の感動ならず夕刊に「小受驗戰士」といふ造語ありたり

はづしたる眼鏡疊に置きながら危とおもふことさへもなし

晩春の山

春暮れむとするころアララギ選歌稿を携へて箱根の山を越ゆ

山鳩の啼きゐる山の下谿(したたに)は川の鳴瀬(なるせ)にそそぎて行くも

みづうみに下りて行かむ道のべに苺の花は咲きさかりけり

ぬばたまの夜あけしかば山膚にけむるがごとく萌黄だてる見ゆ

みづうみの岸より直にそびえゐる太樹の列にわれはまぢかく

しづかなる石かげに來てハトロン紙に包みし
選歌のひも解きにけり

ゆく春の雨ふりそそぎかたむける馬醉木(あしび)の花
のまへを歸るも

くだり來て稍(やや)とほそきし山もとに早川の瀬が
にごりをあげぬ

近況雑歌

春くれむとしつつ胡頽子の白き花咲きむらがりし鉢を並べぬ

茎赤く萌えにし蕎麦をたまはりぬ朝な朝な食すわがいのち愛し

つちのうへに莖(くき)くれなゐに萌えいでしものを
食ひつつ君しおもほゆ

森なかに寒さをたもつかくれ沼(ぬ)に散り浮くも
のは木(こ)の花(はな)らしも

水のうへに數かぎりなきもの浮けり木(こ)立(だち)のな
かの春くれむとす

木芽（連作）

もろもろの木芽ふきいづる山の上にわれは來りぬ寢ねむと思ひて

夜をこめて曇のしづむ山かひに木芽はいまだととのはなくに

山なかに雉子（きぎす）が啼きて行春（ゆくはる）の曇（くもり）のふるふ晝（ひる）つ
方（かた）あはれ

花の咲く馬醉木（あしび）のかげに吾が居れば山の獸（けだもの）や
すらふごとし

みづうみを甲（よろ）へる山の青（あを）だちて空のひと隅（すみ）よ
光さしたり

こよひあやしくも自(みづか)らの掌(たなごこ)を見ゐみ、まかりゆきし父に似たりや

のぼり來(こ)し山の一夜(ひとよ)のまなかひにまぼろし見つつ吾は眠(ねむ)らむ

とほき彼方(かなた)の壁の上(うへ)にはくれなゐの衣(ころも)を著(き)たるマリア・マグダレナ

北平の城壁くぐりながながと駱駝の連はあゆみそめ居り

涙いでてシンガポールの日本墓地よぎりて行きしこともおもほゆ

山襞のうねれる見ればこの朝明ほのけきがごと青みそむるなり

こころ虚しく見むとし思へや山の上の湖にし
きりに曇をおくる

行春の雨のそそげる山なかにためらふ間なく
葉はうごきけり

山こえて雨ふりくれば目のまへの若かへるで
のゆるるこの夜

平福泰子新婚賀

父ぎみが繪をかくそばに時たまに這ひだして
來しことも吾が知る
わが心奥にゆらぎて嬉しきは背の君にしも豈
おとらめや

中村良子新婚賀

とことはに斷ゆることなきみ血筋(ちすぢ)とともしび
の下ににほふにひづま

よろこびをしみじみとして語りたり文明君(ぶんめいくん)と
床をならべて

布野

よろこびの筵に坐りこもごもに湧きくる思ひ
涙となりつ

うつくしく若き夫婦よこよひ寝ば人のこの世
のよしと思はむ

今のうつつに君しいまさば手をとりて互(かたみ)に踊(をど)
り痴(し)れたるならむ

この家に安(やす)らにいねて明日(あす)越えむ赤名(あかな)の山を
まぼろしに見つ

わがねむる床(とこ)の下(した)より清(すが)しくも水のながるる
音ぞきこゆる

湯抱

年まねくわれの戀ひにし鴨山を夢かとぞ思ふ
あひ對ひつる

我身みづから今の現にこの山に觸りつつ居る
は何の幸ぞも

鴨山は古りたる山か麓ゆく川の流のいにしへおもほゆ

「湯抱」は「湯が峡」ならむ諸びとのユガカイと呼ぶ發音聞けば

人麿がつひのいのちををはりたる鴨山をしもここと定めむ

唐鐘疊ケ浦

はるかなる石見の國と思へども唐鐘浦を戀ひ
つつぞ來し

唐鐘の濱の翁と媼とにあふたび毎に地名聽き
ありく

唐鐘の埼をめぐりて浪にぬれ「辛乃崎考」の假説をおもふ

ひろびろし疊が浦の巖のへに腰をおろして疲れつつ居り

下府にわれの心は驚きたり伊甘の泉さま變りゐて

砂彌島

浪の上に平たく見ゆる砂彌島はそのいにしへ
に人は愛しみき

砂彌島は小さく愛しき島なりと思ひつつぞゆ
く曇れる海を

砂彌島の荒磯の石に漕ぎ寄せて吾ひとりなる
心やすらふ

藤原の代のいにしへにこの島に聖きみづ湧き
いでたりけむか

鹽田の傍とほり西濱といふひろき砂原に吾は
かへり來

松山道後

城山に高くのぼりて日にきらふ古(ふる)ぐに伊(い)豫(よ)は
われのまにまに

この國にあふちの花の咲くときに心は和(な)ぎぬ
君とあひ見て

「旅人の晝寢してゐる暑さかな」默禪はわれを
かく寫生せり

正宗寺の墓にまうでて色あせし布團地も見つ
君生けるがに

年古りし道後に一夜ねしことも朧にならむ
われ歸りなば

琴平より高砂加古

金毘羅（こんぴら）、の荒ぶる神をみちのくの稚（をさな）き吾に聞かせし母よ

金毘羅の神いますす山晴れたるにあへぎて登（のぼ）り忽ちくだる

高砂に夜おそく著き部屋にとほれば既にてき
ぱきと床をとる

加古川の川口にある松原を漕ぎさかる海の浪
のうへゆ見つ

印南野は加古のながれを中にして月あかかり
し野としぞおもふ

淡路

淡路なる野島を過ぎて海のべを南へくだる戀
ふるがごとく
まさごよりかぎろひぞ立ついつよりか慶野松
原ここに豐けく

われひとり湊の濱をたもとほり船工場にて暫し物言ふ

湊より淡路の島を横ぎれば鳴門うづしほ見ることもなし

酒宴にもろごゑ響き洲本なる旅の宿りに一夜いを寐ず

大和鴨公

藤原の御井のいづみを求めむと穿ける草鞋は
すでに濡れたる

年ふりし泉のなかに見ゆるもの黒水綿を手に
つかみたる

田のあひに人のかへりみせぬ泉吾手にひびく
までにつめたし

人に言はむ理由もなし色づきし麦生のあひに
泉もとむる

立ちつくす吾のめぐりに降るあめにおぼろに
ならぬあめの香具山

旅中

城山にひとつ寂しく啼く夜鳥ねむる際まで吾
は聞きつつも

むらがりてつひにほがらに啼くものか城山の
うへの朝どりのこゑ

町なかを淺く音たてながれ居るみぎはの闇に
螢くだりぬ

左千夫忌 七月十八日 於發行所

或る時は心さびしきにこだはりて世にいまし
たる君ししぬばゆ

幾たびも水をそそぎてわが居たるみ墓やうやく年を經るなり　普門院

近狀一首

さみだれの晴間ををしみ一日だに大和のくにへ行かむとぞ思ふ

伊香保

昭和十二年七月四日土屋文明橋本福松の二君と共に伊香保に浴泉してアララギ及び新萬葉集の選歌を勵みつ

雨ふりて濁り流るる山川をわが偲びつる溫泉
ぞこれは

とき折に櫟落葉のまじりくるここの温泉を念
はむ兒もがも

北支那のことを語りて夜ふけたる部屋ゆ三人
はわかれ寢むとす

群れ生ふる擬寶珠つむと友ゆけば高野のうへ
に自動車が待つ

老ゆる吾をいたはりたまふ友ふたり高原のうへに草とり飽かぬ

わが友は山の入野に擬寶珠のやはらかを摘む明日食はむため

夏霧は眞下の谷にうごき居り或る時は青々としたる底見ゆ

かつこうの聲の遠そくあたりより果敢なきが
ごと狹霧霽れたる

青々と光の差せる高野原うつろふ鳥も高く飛
ばなく

伊香保呂の湧きて常なるあかき湯にきのふも
けふも穢れをおとす

手帳より

森なかに白き花おもく散る見つつ心遊と言はば安けむ

たかだかと部屋の眞中に絲張りて飛越せと妹に命じつつ居り

あぢさゐの花を傾け降る雨の霽れなむと君の
言ひしゆふぐれ

梅雨降りてひとつ置きたる桃の紅沁みくるま
でに心うごきし

今しがた灑ぎし水に浮きあがる松葉牡丹の小
さき萌えは

眞上よりやや西方に傾ける天つ日見つつ君戀
ひにけり

晨暮二首

ひむがしの野をわれ行けばさみだれの雲こご
りにし中に日は落つ

歡喜天の前に行きつつ脣をのぞきなどしてし
づかに歸る

罪ふかきもののごとくに晝ながら淺草寺のにはとりの聲

うすぐらき小路をゆきて人の香をおぼゆるまでに梅雨ふけわたる

ミュンヘンのScholz教授が立寄りて嘗ての顔をおもひ出でしむ

出動

腹かかへ笑ふもろごゑの中にゐて寂しく吾は
日を瞬りけり

額より汗の垂る日を家いでて表参道を直にし
行くも

すでにして暑くなりたる、街上に命をかけし物音ぞする

兵の移動を目のまへにして角帯をしめし少年とわが並び居り

ひとたびは命死なむをたはやすしと運轉手なりし兵はいで立つ

わが側(そば)にをとめ來りてドライ燒しみじみ食ひて去りたるかなや　　澁谷

横濱の成昌樓につどひたる友等みな吾よりわかし　　七月十七日

シエパアドも既に常識となりたるか淺草皮店(かはてん)の路地(ろぢ)にも居たり　　淺草三首

わがそばの女しきりに煙草吸ふ芝居みる時は
多く吸ふらし

もろともに滅ぶといへど現なる罪にもいろい
ろの種類ある心し

幾年ぶりにわが身に沁みしものの一つ泉にお
りて鷲が水飲む

上野二首

その眼あきらけくしてあな清け尾白鷲は巖の
うへにかが鳴く

富人のロツクフエラア身まかりて映畫のなか
にその聲を聞く

新萬葉集

箱根にありて新萬葉集の選歌を勵むに一區切
終へたればいねんとす

夜半（よは）にして照りとほりたる月のかげわれ獨り
のみ見るがごとしも

まなかひに月の照りたる山なれど一つの谷を
隔てけるかな

B K 放送の歌 八月廿五日作 十月九日放送

天地（あめつち）につらぬき徹（とほ）り正しかるいきほひのまへに何ぞ觸（さや）らふ

國こぞる大き力によこしまに相むかふものぞ打ちてし止（や）まむ

くろがねの兜(かぶと)かむりていで立ちぬ大君(おほきみ)のため祖國(おやのくに)のため

省(かへり)みむ暇(いとま)さへこそ無かりけれ死を決したる空(くう)擊(げき)部隊

八百よろづ千よろづ神のい立たせる國をとよもすいきほひの聲

箱根にて

この峽も日でりつづけば汗あえておりて來に
けり泉を飮みに

月の夜に心こほしき高萱がわが窓ちかく一た
むろせり

暁かけし〇〇部隊の上陸に君居るらむか覺悟を極めて

月讀はさやけきなべに雲ごもる峽のひくきに虹立ちわたる

山の雲うごきながらに月てりてあが心いたし夜の虹はや

七日(なのか)あまりかかりて出づる薄(すすき)の穂(ほ)愛(を)しみたり
にき朝な夕なに

さまざまの山の草花さくまでに吾はこもりて
くだりて行かず

朝蟬(あさぜみ)の鳴くよりも早く吾が起きて歌を選むを
君は知らむか

一國民の歌

よこしまに何ものかある國(くに)こぞる一(ひと)ついきほ
ひのまへに何なる

けがれたるものの滅(ほろ)ぶるありさまぞ空中陣(くうちゆうぢん)の
とどろくなかに

あな清し敵前渡河の寫眞みれば皆死を決して
犢鼻褌ひとつ

あからさまに敵と云はめや衰ふる國を救はむ
烈き焔ぞ

ときのまの心を極めてトーチカに迫れる部隊
おそはざらめや

パラシウトを皆(みな)否(ひ)定(てい)して飛び立たむ空襲部隊の禮するところ

おもひ残す事なしと云ひ立ちてゆく少尉にネエブル二つ手(て)渡(わた)す

上海(しやんはい)戰(せん)の部隊おもへば炎(ほのほ)だつ心となりて今夜(こよひ)ねむれず

あたらしきうづの光はこの時し東亞細亞に差しそめむとす

戰のきびしきさまを幻にありありと見つつ心しづめ居り

敵前に上陸したるありさまをわが言をもて何時かしるさむ

時事歌抄

息もつかず迫り迫れる永定（えいてい）のにごりし河をあるきて渡る

ひむがしの亜細亜を照らす天（あめ）なるや光のごとき大（おほ）聖勅（みことのり）

直心こぞれる今かいかづちの炎と燃えて打ち
てしやまむ

おびただしき軍馬上陸のさまを見て私の熱き
涙せきあへず

壍のなかにすでに冷たくよこたはる少年兵を
目守れりといふ

この任を今の日にこそ果さめと大臣近衛は雄
たけびにけり

嶽のうへに鐵兜よりしたたれる鹹ゆき汗永久
におもはむ

宋美齢夫人よ汝が閨房の手管と國際の大事と
を混同するな

やきつけし夏あわただしく過ぎゆきて戦(たたか)ふ山
に雪は降るとふ

あめつちにただ一つなる命(いのち)さへ今ぞささぐる
悔はあらめやも

大君(おほきみ)はいでたたせれば天地(あめつち)に神(かむ)ながらなる勅(み)
語(こと)のりたまふ

保定陷落直後

陣のなかにささやかに爲る靈祭二本の麥酒そ
なへありたり

かたまりて兵立つうしろを幾つかの屍運ぶが
おぼろに過ぎつ

彈藥を負ひて走れる老兵がいひがたくきびし
き面(おも)持(もち)せるも

十月一日終日降雨

劉家行の落ちたるゆふべ大股にわれ歩きゆく
北むかふ街

上海戰線映畫

彈藥の箱を背負ひて匍ふ兵がクリークのみづにすれずれなるか

壕の内に時待つひまもひとり刀を愛してあぶらを塗るし悲しも

長岡部隊出陣

昨夜より午前につづき冬服になりたる部隊つひに立ちゆく

信濃途上

たたかひに出でゆく馬に白飯を焚きて食はせ
ぬと聞きつつ黙す

隣地

わが家の隣につどひし馬いくつ或日の夜半に
皆發ち行けり

觸發の歌

靖國神社　三首

いのち死にし臣(おみ)もののふにかしこきやすめら
みことは額(ぬか)ふしたまふ

吾よりも先に來りてぬかづける頭しろきは誰
將軍か

戰ひのはげしきさまも勝鬨のひびかふさまも
我が涙に浮かぶ

折に觸れたる

上空に見たるトーチカの寫眞ありしが既に我
軍の後へになりぬ

たたかひの最中にありてをののかむ時のまも
なき命ら終る

いきほひと立ちあがりなば天地に貫きとほり
戰ひ果たせ

「戰鬪の渦」といふこと幾たびも話のなかに交りて居たり

わが國の「渡洋部隊」の名詞ひとつも實戰史のうへの造語なるはや

日々聞こえし「第三國」と云へる語も既に新しき色調を帶ぶ

箱根小吟

昭和十二年夏箱根に滯在して新萬葉集の選歌に從事せりけるに七月末既に支那事變進展皇軍のいきほひ猛火のごとし

吾もまた目ざめむとせし曉(あかつき)の山に地震(なゐ)ふりて
雉子(きじ)けたたまし

あかかりし月落ちゆきて暗闇のあまねきころの庭におりたつ

山中に水の荒びしあとありて石の寄れるを越えむとぞする

こころ凝り起臥すときに軍動きて世はただならね家居りがたし

わがどちの戰にゆく數ふえて心は滾ぎつきのふも今日も

中空に月はかがやき西の峽ただよふ雲に虹おぼおぼし

數十萬の歌讀みをへて疲れたる吾いでて來ぬ峽の砂はら

葛の花ちりがたになりてわが側に茂るも愛し幾日か見ざる

選歌了へてわが歩きゐる峽の道目の下に黑蟻ひとつさへ好し

家ごもり時たちぬればあかあきつ赤蜻蛉よわよわと飛ぶ光こほしく

瑠璃いろの小さき蝶が草のへに飛ぶべくなり
て土は乾けり

ひたふるに猛風如して南下する軍のうごきを
鉛筆にてしるす

山中のこの驛よりも日毎立つ兵おくる鬨の聲
ぞ聞こゆる

つぎつぎにかはる上海戰の戰鬪圖障子に貼りて手帳にも貼る

日々とほる旅客機ならぬ飛行機が驚くばかり速くとほりぬ

谿石に腰をおろして選りをへし選歌のことをしばし思へり

山房小歌

けふ一日(ひとひ)あらし吹ければ百日紅(さるすべり)の散花(ちりはな)庭にさ
だまりがたし

羊歯(しだ)の葉は茂(しげ)りしかども雨ふらぬ夏ふけては
やも素枯(すが)るるらむか

實戰の映畫ながらにあはれあはれせつぱつまりしは平凡に見ゆ

街上を歩きつつ聞こゆ「皇軍」といふ語のひびきさへ神のごとし

わが知れる兵も平和に限りなき命に生くと戰歿をせり

暑かりし夏しぬばむと坐りをる秋の彼岸の一日くもれり

大冊河わたれる兵の頸までも沒すときゝて吾れ立ちあるく

前方に白色の壘も映りたりこの白色の壘を忘るな

宋美齢はそき聲して放送するを閨房のこゑの
ごとくに讃(たた)ふ

一(いつ)家(け)より五人の應(おう)召(せう)を出(い)だせりといふ新聞記
事を凝視するのみ

少年になせる抗日教育も消(せう)極(きよく)抵(てい)抗(かう)に過ぎざり
しこと彼(かれ)知らず

此日頃折々

さ夜なかに胸さわぎする時あれど戦のことしばし思はず

クリークに竹梯子見えたちまちに前のめりして將校わたる

大場鎮おちしといへば部屋にわれひとり立ち
つつ言さへもなし

なきがらを葬る火のおと一隊の銃をささぐる
ときに聞こゆる

ハリウドのくちびる紅きをとめ等が映りて吾
のこころ恥しも

山水圖のなかにうら若き女子の居ぬをうべなふ夜ふけて吾は

機關銃もつ兵ひとりへなへなに掛かりし橋に身を躍らしむ

塹壕に見ゆる眞裸の工兵が今し酒のむ物恐れなし

くろぐろと敵の屍のよこたふも「涙の彼岸」と時におもへり

いくたびかわが目しばだたくたまゆらに過ぐる映畫のたたかひ見れば

箱負ひて一人の兵の走れるもすでに命をかけにしものを

映畫みつつ記しとどめむとおもふうち太原おち軍は蘇州にせまる

太原の城に勝鬨はきこゆれど戰死せし兵ひとりも見えず

命かけて棉の畠を飼ふところ「新晴好天氣、誰伴老人遊」といづれ

初冬

北支那の山にははやも雪降れりとふ氷らむとする河しおもほゆ

泥まみれになりしゲエトル洗ふ見ゆ心を決めし兵の幾たり

柘榴の葉ふるひおとして時雨のあめ降りくる
ごろは君をしおもふ

わが庭の石蕗の花咲きそめて二日晴れつつけ
ふぞ曇れる

いささかの氷砂糖等君の陣に届かむ日ごろ雨
な降りそね

街頭小歌

この界隈(かいわい)に宿りゐし部隊たちゆけばもののひそけくなりたるごとし

淺草のみ寺に詣(まう)で戰(いくさ)にゆきし兵の家族と行きずりに談(かた)る

脚ながきをとめのむれの一列を見れども飽かず老いつつ吾は

街路樹に黄牛ひとつ繋がれて心亢ぶりしわれ和ましむ

戰ひの映畫館をいで歩き來し小公園に眼をあらふ

土嚢かつぐ兵目のまへに轉びしときおもはえ
ず吾の聲が出でたり

昭和通の歩道いそぎてわれ行けり燒印賣を見
つつなどして

ひとりして吾がとほり居る問屋街日曜の午前
に休むことなし

随縁雑歌

螇蚸(ばった)の顔に似し飛行機が音たててわが目の前にあるは嬉しも

顱(ろ)頂(ちやう)より額(ひたひ)にかけて誰(たれ)に似しか母にもつかず父にもつかず

ドイツ製の兜かむれる支那兵に顔佳きをみな
ご立まじる壕

銀座より少しそれたる街角に自由律よむ男に
あひき

閭丘胤の姓閭丘の方が正しといふ考證聞きて
ものおもひけり

國語學者二人と共に支那兵に銃殺さるる夢を視てゐし

普門院に行かむとおもひ行かざりしゆふまぐれにて歌亂作す

わが母は大正二年にみまかりてわが歌一つ讀ましたまはず

脳病院火事としいへば背筋よりわれ自らの燃
ゆらむとせり。

枸杞の實のあけのにほへる冬の野に山より小
鳥くだりて鳴くも

わたつみの中に待機し陸ひくく傳はりてくる
砲を聞くとぞ

戎克ひとつ通りてゆけど誰も誰もかかはりのある面持をせず

冬園に入りわが來れば伸びきりししろがね薄の穂立見つるも

みなもとは石のかげなる冬池や白き鯉うきいでてしまし噞喁ふ

よひよひに露霜ふれか擬寶珠はさながら白くなりて伏したり

おしなべて冬さびにけり瑠璃色の玉を求むと體かがめつ

アネモネは春さく花といひしかど冬の光に咲くもかなしも

南京落つ

わが體（からだ）うづくがごとく喜（よろこ）びて街（まち）ゆくときになべては空（むな）し
十二月十三日

南京に脇坂部隊伊藤部隊せまりて行きしその時おもほゆ
十二月十七日入城式

光華門の爆破前十分に撮りし寫眞に見入れり
吾は。

大道路光華門より入りたるが中山門路と交叉
してゐる

城壁にへばりつくといふ語ありたり其處に幾
兵かいのちを殞す

敵の首都おちむとせし勢の中にパネー號事件
其他あり

南京の陷落戰を免れたる支那の將軍いつか妻
に遭ふ

見ゆる眼が一つとなりて肉薄り戰ひ光華門に
て命をはる

伊藤善光少佐

雑歌控

武林イヴォンヌ（十七歳）

武林イヴォンヌのことをわれ偲ぶ巴里にて見
しその女童を

海彼岸

海の彼岸より通信あり砲身に鑄られて無くなりしメンデルスゾーン

ライプチヒ來信

民族の純粹化といふ叫びごゑ既に過去世のものを襲はむ

童謠

妻いだく時のあひだはわれ知らず homo alalus の
群がりを見よ

スパイ等はわれに來らず Volapük 空想しゐて時
の移れば

くれなゐに染めたる爪を嚙みながら常に臥虎をおもふことなし

賀歌

藤なみの花の紫永き日をこのよろこびに吾逢ひにけり

中村家のために

春の光若葉のまにま照る時に君さきはひの道
の上に立つ　　友のために

伊藤信愛氏を悼む

うつせみの君とまぢかく語らひし一夜（ひとよ）かぎり
て永久（とは）にあひ見ず

山茶花(さんくわ)の散る花びらは木のもとのめぐりにあ
りて悲しきろかも

みすずかる信濃のくにと聞くにだに君が罷道(まかりぢ)
いたまざらめや

竹下澄人君を追慕する歌（行雲流水序）

ねもごろに書きて遺しし文見れば君と膝ちか
く語らふがごと

慌だしく十五年經てあひ見ざるときに君こそ
悲しかりけれ

長崎に三年さびしくあり經けむ頃を偲びて君
忘らえず

浦上の丘を越えつつクルスある墓めぐりにし
こともおもほゆ

寺町のくらきとほりをくだり來て二人は明き
街を行きけり

長崎は戀しくもあるか君とわれと川の汀に下
りゆきしころ

あるゆふべ君がみづから呉れたりし我口ひびく佐賀の蟹づけ

いきほひて君が創りしフストール我は服みにき大正九年

ほがらかに豊けき君が眼を見つつほしいままにてありしころはも

西空に遠暮れのこる長崎の光と君とわれはおもはむ

泉幸吉氏夫妻渡米送別一首（三月廿六日）

ゆたかなる心二つが相寄りて春日かがよふ大海わたる

岡山巖氏三著出版記念會（四月十五日）

岡山の巖見に來とひともいひわれもおもへど
あはれ行き得ず

われ一人ゆくもゆかずも大勢にかかはりなし
とさ思召しあれ

入澤の達吉先生にも御ぶさたせりこよひの會にてよろしくねがふ

秋月延生(原田庫之介)墓碑刻歌

新みどりそよがむ春のめぐり來ばいやさらにして永久にしぬばむ

大阪朝日新聞二萬號賀歌（六月廿七日）

ともしびをかかげすすみし功績（いさをし）を吾ももろと
もにここに讃（たた）へむ

ひとひらが積（つも）りつもりてあな尊（たふ）と二萬（にまん）のかず
を祝（ほ）がざらめやも

大君のみことのまにまかしこみて正しく豊に
世を導かなむ

「土」上演を祝す（十月）

心こめて君の遺ししものがたりもろもろ人に
今ぞ沁みわたる

茄子の歌（椿一郎氏に）

わがあゆみ立ちどまりたる茄子(なす)畑(ばたけ)老(おい)のいのち
をしばし樂しむ

水戸彰考館（十一月十一日藤森君同道）

わがこふる書(ふみ)をとめ來て園のへのもみぢ淸(さや)けきけふにあへりける

よろづ巻のふみを守らし尊くもいやとしのはにさきはひいませ

、寄雨谷大人

山形縣堀田小學校のために

あかねさす日のまともなる高岡に心ゆたけく
子らは學ばむ

ムソリニ首相に與へし

七いろの綾とよもして雲に乗る天馬從ふ君を
仰がむ

寄武藤長藏先生

武藤長崎高等商業學校名譽教授在職三十年
記念に偶晩香玉の花瓣を贈られしかば

しぐれ降る寒き日ごろに香（か）ににほふ君にたぐ
へむ晩香玉（ワンシャンユイ）の花

白花の晩香玉（ワンシャンユイ）を身ぢかくに置ければ君と相見るごとし

ここにして晩香玉（ワンシャンユイ）の高き香は君がいさをし讃（たた）へよとこそ

わが夢にかよひても來む晩香玉（ワンシャンユイ）たわやめならぬ君し偲ばむ

月よみの下びににほふ月下香長崎にわがあり
し日おもほゆ

色紙に書きし

白雲の中に入らむとおもふ老勝関ききに今日
も街ゆく

ホームライフのため

勝関(かちどき)のひびきの中にけふ一日(ひとひ)心しづめて吾は居るべし

福岡日日新聞のため

祝應召澁澤喜守雄君

亂軍の時はさもあらばあれ常(つね)の日(ひ)は若き力を小出(こだ)しに使へ

折にふれて

一切の女人はわれの母なりとおもへる人は清く經にけめ

自らの命斷つほどにワイニンゲル泣かしめし女おもへば悲し

昭和十三年

貫徹

あま照らす光を負へる御軍と瞳の碧きもの等
知らずや

なまぬるき事にこだはり後悔いむ神は許さじ
許すことなし

けがれたる敵(あた)ほろぼすと戰(たたか)はば戰ひ遂げよこの天地(あめつち)に

國のために直(ただ)に捨てたる現身(うつそみ)の命(いのち)の靈(たま)を空(むな)しからしむな

言(こと)さへぐこちたき國ら何といふとも我は貫(つらぬ)き徹(とほ)すとおもへ

新春

今朝（けさ）のあさ初雪（はつゆき）降れる山あらむ既に頻（し）き降り
し山より低く

今朝（けさ）の雪を處女（をとめ）雪（ゆき）とぞいひにける寒さは肉（しし）に
とほりて居れど

にひ年の家ごもりつつみちのくの藏王ふぶくと聞けば戀しも

一とせを亂れたりけるわがまはり片付けぬればをりをり寂し

新しき年のはじめに勝戰徹らむとすることの聲あぐ

寒の華

濱木綿の鉢を家に入れ守り居り午後にしなれば日の光さす

ほしいままといふ人言はさもあらばあれくれなゐ深き薔薇を愛でつる

寒き日に濃きくれなゐの薔薇を愛でしばらく
にして晝寢ぬわれは

二百機のかへり行く音我が窓より少し高きに
聞こえつつあり

美女の顔たちまちにして驚くばかり大きく映
り睫毛またたく

冬がれに入る山羊歯をこの年もわが見て立てり孤獨ごころに

くらくなりし衢のうへに月照らず燈いましむるすでに七日か

ゆくりなく話のなかにいひいでぬ愛し夫ははや寢つらむか

寒の入り昨日よりにていささかの日の延びし
時カナリア啼くも

學生のころぞおもほゆる麗しきをとめ映畫も
無かりしころぞ。

なべて世は動きすすみて富人も貧しき人も生
き飽かなくに

我國を直におもはばかぎりなく底ごもりせる
力おもはむ、

たたかひに行かざる吾は家ごもり心凝りつつ
事をし爲さむ

冬のあかつきも未だ暗きよりペン執らす徳富
蘇峯先生おもほゆ

ゆたかなる武運にあれとうちこぞり部隊の兵
は餅食ふらむか

部屋にして紅梅の鉢置きながら幾たびにても
そのまへ通る

くれなゐの梅散りがたになりたるを目守らむ
時も無くて過ぎつも

忽ちに飯店出來て兵いで入る「突撃めし」といふ看板あはれ

彰徳西南方十五キロあたりに居るらしき工藤部隊が新聞に見ゆ

あはれなる結論ひとつ遠き世のクレオパトラもかく香ひけめ

寒林

ふたたびも大雪降りて消のこれる冬の山より水音きこゆ　伊香保

日かげりて斜に空をおほひたる楢の木はらは冬さびにけり

しげりつつ在りしながらに冬がれてこほれる
雪のうへに伏す草

この神に逼り乞ひ祈みし現身はたたかふ兵の
妻なるか母か

榛名神社

黒々といかし巖を保ちたる相馬が嶽は冬がれ
にけり

虎耳草

きさらぎの寒き日のびて來(こ)しかなや衰へて風邪(かぜ)よりたちあがりたり

虎耳草(ゆきのした)生ふるところに日が差せば土あらあらし冬逝(ゆ)くらしも

床ぬちに吾臥しをれば盲ひたる宮脇武夫も死にてかへらず

重慶を爆撃したり火げむりの立ちけむ時をおもはざらめや

日曜の朝起きいでて雲南の昆明府に赤きしるしをつけつ

大の里大連にありて死にしこと相待的に人等
悲しむ

息を屏めて吾の云ひたる獨語はや「戰歿の間際
に悲しみは無し」

おろかなる日々過ごせども世の常の迷路に吾
は立たずも

小生活

山に鳴く雌雄の小鳥がとほどほし冬田にくだり飛びてむつめり

冬もはや過ぎ行きけりと部屋中に書ら亂れてわれの香ぞする

闘ひし飛行機を直ぐ目のまへに見てたつ吾は
怪しみもせず

この夜ごろかぎりなき星かがやきて寒田のう
へに雨降らなくに

眞向へる雀斑をとめがにほひだち古の代の佛
のごとし

夢ぬちにいで來るみれば戰にたぎちしこころ
底ごもりせる

雨はれし木原の中の沼の水にたまたま見えし
紅の魚

妻ごめにこもれる友を淸しむとせまき巢に吾
もすわれり

春されば落葉の中のひとつ萌(もえ)ただひとりのみ
戀(こほ)しくもあるか

數千の女學生らの行進(かうしん)を見たりしことを思ひ
うかべつ

ひとに會(あ)はず我家(わぎへ)のなかに居たりしがその夜(よ)
空(そら)はれて冴えかへりたる

春陽

並槻(なみつき)はいまだ芽ぶかずあをあをと芽ぶかむと
する時しおもほゆ

海のべの砂にもえたつかぎろひを見ず久(ひさ)なり
し春は眩しむ

海のべにこころ極(きは)めて居る時し戦(たたかひ)のこと暫(しま)し
おもはず

榛(はん)の花青(あを)く垂れつつ海の風とほりて吹かぬこ
の小(を)峡(かひ)は

野のうへの白き斑雪(はだれ)をわれの入る木(き)原(はら)とほし
て見らくしよしも

榧(かや)の枝(え)につもりし雪を口づから食はむとぞす
る我ならなくに

たたかひに命(いのち)果てたる現身(うつしみ)はとことはにして
悲しくもあるか

をとめ等がゑみかたまけしたまゆらを常(つね)なる
ものとおもふことなし

「改造」の二十周年のよろこびは現實史の上の
血しほとおもへ

そこはかとなく吾入り來ぬるこのゆふべ木下
闇にも雪は降りけり

童女むれて街を歩ける入學のことのみにかか
はりて歩ける

開北のけむり

ゆづり葉に斑雪ふりおほひしづまりしこの園中をふたたびとほる

昨年の十一月の映寫なれど開北のけむり空くらましぬ

來華助戰洋人といふ美しき護照あればわれの
顔を近づく

われ學生群に向き色欲も無所畏無所畏と言ひ
たるあはれ

この梅を愛でむいとまも無かりしと青葉の萌
えし鉢はこび行く

塵づきし部屋片付けて出て來たる西安事件の
切抜すこし讀む

たかだかと獸皮つみたるトラックの並び走る
は戰に關係ありや

朝たちて試驗に行きし長男ををさなのごとく
たまゆらおもふ

いなびかり光りてのちに鳴る雷の鋭き時に獨り居れば好し

杉はらにたまりて居りし落葉かな寒山なしてあれひとりゆく

唐生智銃殺せらると報ずれど緊張したる背景ぞ無き

春

高槻のはやき若葉は黄にこそよぎおそきはいま
だ枯樹のごとし

われよりも背高くなりし子と共に秩父宮殿下
の御聲ききたてまつる

四月十日

かへるでの新葉のみどりとのふときのふも
今日も風吹きたつも

冬枯のさまといふとも赤芽出し草見ゆる野に
嘆きを留めむ

まぢかくを山鳥あゆむおそれざる山鳥みれば
悲しきろかも

選歌行

保土ケ谷の高處に見ゆる家群はイタリアの國
ゆけるに似たり

山ざくら咲きたるところとほり行き心はきよ
し言ひがてなくに

山のたをひとつ越え來て下谷に蛙のこゑす水ぬるまむぞ

山かげの道に木通の黒き花ふふまむとする時は來りぬ

鎌もちて楤のこのめを君が切るおどろが中に吾待ち居りて

楤の芽の萌えしばかりを食はむとて軍手をは
めし君が手摘むも

いたぶりて浪の寄するを身ぢかくに風呂の火
を焚く音とおもひし

なぎさ邊をならびていゆく君が髭やうやく白
しうれしきろかも

干潟にしあるか無きかにゐるものの紫の毒吐(は)き出すあはれ

夜(よ)もすがら浪の荒れしがおとろへてうたかた白くここにのこれる

幾年(いくとせ)か歌にかかはり經(へ)たりける二人(ふたり)ならびて汀(なぎさ)かへり來(く)

底ごもり

我庭の隅に萌えいでし蕗の薹幾つかありては
やくほほけぬ

わたつみの奥(おき)にこもれる悲哀(かなしみ)をわがものとし
も思ふ時のま

北支那のはざま通りて戰へる若き少尉は何を
欲りせむ

敵前に上陸したるころほひの心とどろきは底
ごもりたり

山吹ははやく青き葉もえそめて人の眼もさや
けかるべし

人皆の笑ひて過ぎむ事にしも心いたみて晝寢。
すわれは

木蓮の白き花びら散りしける木の下かげをと
ほりて行ける

伊太利の使節人らを迎へたる酒莚にゆきての
ぼせつつ居り

パルセロナ陷らむとする通信をはや珍らしむ
ごとくに聞きつ

パルセロナ救援といふ語ありたり救援の語は
直接ならず

灸點とHormon等とこもごもに關はり居りて人
ぞ富みたる

くれなゐの椿の花の落ちたまるこのあはれさも見ずて久しも

さ庭べに萌えし羊歯群見すぐしてきのふもけふも家居らなくに

いそがしく同級會より歸り來て熱河の話二三行書き留む

羽前なる弟の子が滿洲に行くをよろこび飯く
ふわれは

台兒莊包圍戰鬪の終末を聞かざるうちに海邊
に行くも

むらぎもの心いたはり起臥せばあからさまに
私の言さへもなし

かしこくも騎兵中尉にましませる殿下の御馬
とも勇むらし

くろぐろと蟻行進のさまを見て徐州戦は既に
近しとおもふ

ひそかなる軍醫中將の話あり猥談に似て息づ
まらしむ

決死兵も映畫にてはただ日常の行爲のごとく
映りてゐたり

節忌

二月十三日
於發行所

ここに今日集ひて君を偲ばむも遠く過ぎたる
おもかげにして

赤彦忌

四月十七日
於小石川後樂園

笹(ささ)青くまどかなる山吾は見て君は見ざりしことを悲(かな)しむ　小廬山

笹むらにしづまりてゐる鶴(つる)ふたつけふの春日(はるび)に見らくし樂し

憲吉忌

五月十五日 於發行所

一とせはまためぐり來て墓のべの酸模(すいば)の花もほけにつらむか

人麿のことをおもひて眠(ねむ)られず赤名(あかな)越えつつ行きしおもほゆ

沼

かぎり無くこまかき草は萌え出しを怪しとおもふ小野に入りつつ

過ぎし世の行爲にあれどこの寺は「守護使不入」と石に彫らせし

吾が歩むみぎりとひだり畑にて大麥よりも小
麥が秀づ

黒き森そびゆるがごと一方に見えつつ畑の中
をわれ行く

上井草の道路を過ぎりゆきしかばははその木
立いまだ芽ぶかず

わきいづる沼(ぬ)のみづ湛(たた)へいまだかも寒くしあれや鴨は歸らず

春さむき辛夷(こぶし)の花はこの沼(ぬま)の水にしづきて散りがてにせり

鴨どりは沼(ぬ)の上(へ)に浮けど或るときに飛びてさわげり羽ふらしも

鴨がねはすぐま近くに聞こゆるを雲より下りしものと見て居り

春いまだ深けて行かざることわりに水より出でし青葦みじかし

わたつみの砂濱よりも悲しかる常水づく土黒く續きつ

○しみじみと沼のほとりなる常じめり此處にし生ひて冬枯るる草

わが家の幾本かある椎の花散りしくころは歸らむ鴨か

いましめて鳥打つ銃の聞こえざるこの沼のみづに鴨どり浮かぶ

をやみなく澄みて流るる川のべのわれの後(しりへ)に
友ひとり居り

身をかがめ暫し見入れる流(ながれ)にはいささごあきら
かに滞窒(とどこほり)なし

萱草(くわんざう)はむれて生(お)ひたり枯芝(かれしば)の上に青々と眼(め)の
清(きよ)むまで

トオチカ

いきほひの昇らむ國に生れあひし君と吾とは
樂しきを經め

トオチカの厚さ幾十米と兒等暗記して相言ふ
聞こゆ

われつひに老いづきしかど氣屏めて處女子の
色の反射する見む

三叉神經の微々末梢と誰、かいふ齒痛の去りし
夕まぐれどき

春の夜の午前二時より目ざむれば牀の中にて
ものをしおもふ

夜毎に徐州戰より聞こえ來る放送のこゑは壕にて言ふか

甚すぎて春いかづちの鳴るころは朝のうちよりわれ力なし

出羽ヶ嶽勝ちたるけふをよろこびて二たりつれだち飯くひはじむ

平野屋にて出羽ヶ嶽と予

御柱行

御柱(おんばしら)の奉仕(つかへ)を見つついきほひの猛(たけ)くあらぶる神にひれふす

岩波・藤森二氏同道

現身(うつせみ)のわれが聞きつつ樂(たの)しかり數多(あまた)の蛙(かへる)とほりて鳴きぬ

八ケ嶽より切りいだしたる太柱宮川の瀬に一
たび潔まる

年老いて逸話遺ししも親しかり嘉納治丘郎翁
しのばゆ

諏訪湖よりあまた飛びきたる昆蟲が燈火にす
がるを迷といふや

露伴先生

春深けしけふの一日をゆたかなる心になりつ
君が邊に居て

五月二十二日

大理石雲南の山脈にいでしより古りつる名を
ぞ今にとどむる

石斛を愛でいましけむゆゑよしも聞かぬに阮
元に移りたまへり

白芨をもつて硯の割をつぐ「血」はときにより
「のり」と訓ましむ

來禽はすなはち林檎のことにして或るときは
露伴先生の「音幻論」

梅雨まで

過ぎらむとするのか否か不明にて歩道に來たる黑猫ひとつ

この原に胸當をして伏し居りし兵の幾人實戰に死す

松の芽のやうやく長く立てるをしあやしむが
ごとわが入りし山

自轉車のうへの氷を忽ちに鋸もちて挽きはじ
めたり

母に手を引かれて行ける穉兒を見つつしゐた
り歩みとどめて

ともなはむ物さへも無き吾がそばの石あたたまる青葉しみ山

わがあゆむ木下闇より見えながらあかるき小野の界られにたる

この山にわれの戀しき一樹あり夕ぐれぬればをりをり見に來

おもふ間もなくけむりの出づる銃丸が右季肋部よりころげたりとぞ

蒸暑き日にはおのれの額より汗は垂りたり紅の胡頽子の實

どくだみの白き小花は過ぎむとす飽けるがごときさみだれ降りて

小さなる目的ひとつありしかど澁谷まで來て
われ戻りけり

潛山のたたかひ既にをはれりとおもほゆるま
でこころ虚しも

戸をしめて遠地をおもふこの夜ごろ杏子黄い
ろになりにつらむか

ひとりのみ吾行きしかばいつしかとうすくらがりし山に、鳥啼く

日もすがらなま暖き風ふけば靡きとどまらぬ雲の下の花

おのおのは陰をふかめて羊歯群のゆふまぐれどき見らくし好しも

海邊

おほどかに眼路はひらけて浚渫船海の上より
音ぞ聞こゆる

六月二十日

家いでて來ればひろびろとしたる海線をなせ
る雲段をなせる雲

吹く風は海より音しまだかくの葦群につづく
青草のはら

わたつみの吹きしくけふの風をいたみ曇うつ
ろふ海邊葦原

遥かなるものにもあるかおもおもと曇の靡き
北にかたまりぬ

放水路

直線に此處を流るる放水路青き葦はらにサイレン鳴りわたる

六月二十五日

青原に入りつつ來れば生ふる葦やうやく荒く湧く水のおと

目の前に川平明に見え居りて青浮萍も水泡も逆流す

草はらの中に小流の泥に住む儚きものの等出でて雨に濡る

豊かなるこの水中に鰻鱸沙蠶を食はむさましおもほゆ

酸漿草

ひとむらの酸漿(かたばみ)ぐさを吾が愛(め)でて朝な夕なに
庭におりたつ

すさまじき黄河の水のみなぎりも映畫なれば
忽ち見えず

暫くは廊下をゆきてあひ對ふ狂人も吾もとも
に汗垂る

バケツより雜巾しぼる音きてそれより後の
五分あまりの夢

言ひ繼ぎし「武門の譽れ」といふこともいまの
現實にかなしく聞かゆ

夏深し

くろずむまでになりたる茱萸の實を前を通り
幾つか食ふも

二十人餘りの男合唱す僧院はチロールあたり
かとおもふ

洋傘(かうもり)を持てるドン・キホーテは淺草の江戸館に來て涙をおとす

雨降りて居れば我が窓の薄明(はくめい)に鴉啼きゆく聲も聞こえず

擬寶珠の長き花莖ひとつ立ち日のゆく道に傾きはじむ

忽ちに映畫(えいぐわ)過ぐれど安慶(あんけい)の燃ゆる煙はただならなくに

飛行機の上より遠き眼下(まなした)に黄河の堤(つつみ)破(やぶ)れつつあり

小さき蛾が部屋に入り來て飛び居るを何に止(と)まるかとおもふこともなし

朝宵に梅雨は降れれば既にして羊歯のむら立
おどろをなすも

道の上にかたまりてあるトラックは軍用色に
塗り終りたり

汝が眼にたまる涙にうつるとき吾の面わは數
倍ならむ

わが部屋の疊の上に屆きたり山にて常に雲にぬるる花

あまつ日の遂に見えざりし市中に色新しき茄子並びけり

南ともつかざる方にひろびろと曇動きて海に梅雨ふる

おほどかに閉ぢし曇りの一ところ明るみながら陽ぞ隠れたる

イロニイを数多用ゐて万才の女は男をしきりに辯護す

月光の中にあらはれ歌うたふ女三人のほそき聲はや

山のべの草苑の蟋蟀鳴くころとなりにけらしも夏は深きに

墺太利をおもふ三首

部厚なる肉體のいろにほひだつ人工樂土と誰が言ひそめし

山の雪にひと夜寢たりき純全にも限ありてふことは悲しく

竹内六郎君送別（七月六日幸樂）

三十四歳一等兵の君征(ゆ)かばおほどかにして敵(あた)平(たひら)げむ

事變一周年（七月七日）

戰の一周年目に家いでて揚子江の浪高き寫眞
見てかへる

東京驛

戰にいでたつ兵を見おくりて群集にひとり西
洋人まじる

箱根

みづからの食(く)はむ米(こめ)もち入りて來し峽(かひ)の大門(おはと)に雲とぢわたる

さねさし相模(さがみ)越えつつ雲のなかの天傳(あまづた)ふ日をおもはざらめや

飼ひおきし五つあまりの蟻地獄疊のうへに持
出して來る

雲ひくく川瀬のうへにうごけるを見つつ飽か
なく古人なすも

瀬のおとの迫むるなしつついく夜の月かげさ
さぬ山に起臥す

馬追

七月に來りてわれの親しみし一もと薊花終る
見ゆ

吾をおもふ悲しき友のひとつにて嵐だつ夜に
馬追來居り

いつしかも楢の木立に平らなる流となりて砂地さへあり

わが歩む小野のうへにて蓼の花咲くべくなりぬ夏をはりけり

夕ぐれに近づくころのはつかなる淺黄の空を凡にし見めや

明神嶽

むらがりて木立に鳴ける朝蟬はとほく眼下に
なりて聞こゆる

黒生山斜めになりて見えそめしその頃われの
汗しとど落つ

おそらくはこの峯ちかくとどろきて雨の降り
けむあとどころこれ

傳ひ來し峰のうへにて小林のひとつある中に
入りつつ居たり

峯の上のひくき木原のいづこゆか鳴く蟬のあ
りあやしき聲す

金時山

一方は高萱にして一かたの木立のなだれ粗く
あらしも

現なる眼下とほきを火をあげし山のなごりと
見つるけふかも

霧うごくとばかりに香ごもりてあやしと思ふ
谷あひ行くも

をやみなき雲に觸りさびしきまでに箱根の峡
を見おろしにけり

身みづからこの山の上に居りにけり近きごと
天つ日わたり時ゆくや

左千夫忌

六月十九日於發行所

けふひと日ものさだめなき空合(そらあひ)の梅雨(つゆ)ふけむとして君をこそおもへ

眼鏡(めがね)ふたつ掛けしおもかげありありと見ゆることあり寂しくもあるか

子規忌

九月十八日
於發行所

尊（たふと）かる君の年より二十年（はたとせ）もわれ生きのびて歌はげみ詠（よ）む

つき草もおほかた過ぎて正岡（まさをか）の大人（うし）を呼ばはむ日は近づきぬ

祝歌五章

神と共に進み進みて絶待に迫りて迫る包圍の
大軍陣

漢口は陥りにけり穢れたる罪のほろぶる砲の
火のなか

敵軍の根據の滅び徹底して大きアジアの曉明いたる

あやまれる蔣介石の面前に武漢おちて平和建立第一歩

今とどろとどろ天ひびき地ひびく聖き勝どきや大き勝鬨や

その折々

通草の實ふたつに割れてそのなかの乳色なす
をわれは惜しめり

石山に前こごみの兵と砲身を負ひたる馬と二
秒ばかり映る

絶待に爲遂げねばならぬ現實だからしてこの
後續部隊あり

隘口街より追擊戰に移れりと知るときわれも
聲を立てなく

あかあかと海のなぎさを照らしたる秋のよの
月あかあかつきに落つ

相模の海

ぶだう

むらさきの葡萄のたねはとほき世のアナクレ
オンの咽を塞ぎき、

おほつぶの葡萄惜しみてありしかどけふの夕
はすでに惜しまず

ただ見てもわれはよろこぶ青ぶだうむらさき
葡萄ならびてあれば

黒葡萄われは食ひつつ年ふりしグレシャの野
をおもふことなし

をとめ等がくちびるをもてつつましく押しつ
つ食はむ葡萄ぞこれは

山房折々

木原

木立には小鳥來鳴きてうつせみの吾の痛々しき心は和ぎぬ

機關銃のおと銳きに秋の日のこの原なかに小鳥來啼くも

しぐれの雨この朝はれて木原(きはら)にはたのしく啼ける鳥のこゑごゑ

まをとめの乳房(ちぶさ)のごとしといはれたる葡萄(ぶだう)を積みぬわがまぢかくに

十月二十五日

「皇軍おほいに勝ちぬ」の句神皇正統記にあり
心つつしむ

漢口は燃えつつありといふ聲のそのかたはら
に人聲きこゆ

宮脇武夫歌集序歌

盲(めし)ひたる君(きみ)なりしかばわがこゑをなつかしと
いひて近く居りにき

くれなゐの蓮(はちす)の花も目(め)にわかずあり經(へ)たりけ
む遺歌(のこしうた)あはれ

朝よひに君が起居(たちゐ)のおもかげの永久(とは)に遺(のこ)りて
かなしきろかも

十月三十日の忌日を過ぎつつ

わがよはひ百穂畫伯のみまかりしよはひを過
ぎておほく晝寢(ひるい)す

十一月六日電報來

山西のあたりにてか戰死せる中尉をおもひ一夜ねむれず

むなさわぎせしこと一再にとどまらず九月以來通信も斷えて居りにき

あやしくも動悸してくる暗黒を救はむとして
燈をともす

十月二十七日山西省絳縣冀封村にて陸軍中尉
山口隆一戰死す

漢口陷ちてとどろきし日に山西の小さき村に
戰死をしたり

十一月十五日漢口慰靈祭

捧げ銃の號令きこゆつぎつぎに銃きこゆは涙をつたふ

揚子江ふく風強きけふの日に六千の靈を呼びて止まずも

戰友(とも)呼びて銃(つつ)をさぐる兵(つはもの)の顔のこの尊(たふと)きを
忘らるべしや

十一月二十日

朝はやくより穉(いとけな)き子(こ)を疑ひたりなどして冬日(ふゆひ)
みじかし

十一月二十五日

漢口にすでに雪ふるありさまが映畫となりて
われに見しむる

空中より岳州燃ゆるところ見ゆ右上方は洞庭
の湖

一月二十六日

五日(いつか)の月は燈(ともし)なき街上(がいじやう)に角(かど)ある屋根のかげを
おとせり

つれあひの無きわれひとり街上(がいしやう)に原始(げんし)のよる
をおもひつつゐる

十一月二十八日

しづかなる午前十時に飛鳥佛(あすかぶつ)の小さき前(まへ)にわれは來りぬ

十一月三十日ゆふべ

靖國の社のそばのかすかなる英靈假宮に來り
額伏す

十月はじめつ方よりつぎつぎに人うせにけり

いくたりの人のいのちを堪へがたく歎きなが
らに識くれむとす

挽歌

勲功は人こそいはめ君一生おほどかにしてをはりたまへり

岡田和一郎先生

かがやかしき業をおもへばかしこきや我等けふこそはみ靈を呼ばめ

入澤達吉先生

君と吾と仲善くあれば相ともに遊びしかども
人は嫉まず　神保孝太郎君

うつせみの身まかるごとくしづかなる佛にな
りぬ吾が傍に　松田やを

日もすがら樂しきごとし家内に居りて働けば
外に遊ばず　同じく

山房微吟

漢口に進みたまひていましますす殿下の御こゝろ
聞きたてまつる

をとめ等の樂行進をわれは見てこゝろをどれ
りをとめ清けく

ガード下われゆくときに轟きて列車とほれり餘響みじかし

わが國の人ら瞠目したれどもミュンヘン會議は既に第二的のみ

秋の陽は雲のしたびに熟したる苺のごとくなりて入りゆく

涙にじむ林芙美子がお話を公會堂にてわれは聞きたり

皮膚白く瞳孔あをき形態と皮膚黄いろなる形態われは

武漢三鎮なだるるなして落ちしかば我が心今日も呆けたるごとし

目のまへに大川のみづ見るゆゑに隅田公園は
寂しきろかも

岸堰は幾何幾何幾何と計算ずみといふを聞き
ゐる

お歴々らの心きまらばこの時に「施無畏」のま
へにひれふして見よ

小地震いくたびとなく搖りて來て棚の書物のはみ出すあはれ

わが撰りし「萬葉秀歌」の小方册をひとり枕べに置きつつねむる

かたまれる軍馬の寫眞見るときはさながらにしてわれの身に沁む

英靈凱旋

十二月二十四日朝、松井、工藤、小田、高樹、井上、今村、大隈横山以下諸部隊の英靈芝浦に凱旋す

「國の鎮め」悲しき樂のひびき來て一千二百七十五の御靈

戰ひて命終りしもののふと云はば安けし悲しくもあるか

國のためささげまつりしたましひに君も交りてここに還れる

山口隆一大尉

品川の驛に別れしおもかげも髭少したて汝が父に似て

實戰を繰返しつつ居りたりし工藤部隊の悲し
きみ靈や

一つ艦に乘り來しみ靈おのおのの山河のべに
歸らむとする

うつつなる此世まかりて今こそは篠應和尚の
みそばに行かめ

雜歌控

新萬葉集を賀して二首（二月十七日）

人麿のうたの載りたる萬葉と友のごとくにすわる新萬葉

新萬葉の第一巻を見たるとき孔子（くし）のごとくに
心をどれり

伊川氏魚介圖贊歌（三月三日）

山のさちはさもあらばあれ海（うみ）の幸（さち）おのれが幸（さち）
とものおもひをなし

山形縣歌人協會年刊歌集序　（五月卅日）

やまがたの野(ぬ)をしおもほゆ白頭翁(おきなぐさ)並みふふむ
らむ野(ぬ)をしおもほゆ

平野秀吉翁「高嶺いばら」序歌　（六月）

青山(あをやま)に行くらむ君は人しれず山の聖(ひじり)となりて
いまさむ

佐佐木博士より金槐集古鈔本を送られけるに

鎌倉(かまくら)のおほゝまへつぎみの歌巻(うたまき)をいかにか愛(め)で
む君がたまもの

平福一郎氏宅即事

みどり兒のおひする祝ふともしびのかがよふ
もとにわれ酔ひにけり

もろともに祝ぎに來にけり乳足ひて今にこに
こと玉の如き子や

林愛吉氏藏人麿像に題す

いにしへの歌の聖(ひじり)の尊きを人がたにしていや
とことはに

祝朝日新聞五十周年

永遠（とことは）にさかゆるくにに五十年（いそとせ）のこの勳（いさをし）を忘れ
ておもへや

鹿島氏歌集「白光」序　（七月十一日）

いにしへの歌の聖（ひじり）も知らざりしアマゾンの河
やサガレンの海や

送高安國世君應召・（八月三十日）

八百（やほ）よろづ神導（かみみちび）かすたたかひに若きますらを今ぞいでたつ

前田多聞ぬし文化大使として渡米せらるるをことほぎて一首（九月）

天地に透るまことを欲りしつつアメリカびとは君待つらむぞ

初秋

百萬の常備軍馬の記事ありしその切拔をけふもさがせり

秋雲は河を越えつつ退きゆきて高槻ちりぬ昨日も今日も

この庭の三尺にあまる月草のしげりやうやく寂びにけるかも

靖國の社のそばの假宮にわれぬかづくとただひとりのみ

題良寛

鉢の子に赭(あか)くなりたる栗(くり)入れて歸りましけむ
聖(ひじり)しおもほゆ

山口隆一

宮報にて吾は知れども自らの中尉になりし手紙まだ來ず

悼藤島兼道夫人

白菊の光に映ゆる時來なば心しづめて君を偲ばむ

鬼川俊藏吉植庄亮二氏（十一月二十四日）

久々に君と相見れば一國の米を論ずるいきほひぞよき

神保を偲ぶ（二十五日會の爲めに）

酒のみて痴むとすとも在りし日の神保おもへば涙し流る

醉泣は誰とかもするありし日の君を偲びて醉泣かむとす

たわやめは幾人來とも障なし佛のまへに戯れもせよ

朗けき神保おもへば今日こよひ倒れむまでに
とよもして飲め

阜新縣なる甥に與ふ

野を遠く雪降りつらむ降る雪に汝は驚くこと
なかるべし

寒しとも何おどろかむ日本國東北うまれの少
年汝は

伯父われも滿洲を知る國ひろくおほどかにし
て汝は働く

日のつとめ果して飯を食ふ時は高き心を汝に
與ふる

あたらしき光のごとき建國の心を持ちて飯を食はむぞ

菊山當年男氏伊賀燒芭蕉窯作品展覽會祝歌

窯の火の淨きなかよりあらはるる小さきものも君がたましひ

昭和十四年

歳旦頌

あらたしく年たちぬるを耳ちかく囁くこゑと
樂しみて居り

白柚は南のくにのかぐの實ときのふけふも
愛で飽かなくに

やはらかき餅を咽にのみこみて新幸の心を遂げぬ

遠くゆく鴉のこゑを聞きてをり五十八歳のあかときにして

朝日かがよふくに生ましたりけむ時の豐榮に八十島かけて

朝陽映島

鶴

鹿兒島の阿久根（あくね）の島の鶴（たづ）のこゑ一しきり聞く
わがまへちかく

くびあげてゐる鶴（たづ）ふたつあとはみな右（みぎ）のかた
向くその寫眞見つ

かく近く羽(はね)ひるがへる大きさを始(はじ)めて見たり
　天(あめ)のたづむら

羽(はね)をひろげてとほく天(あめ)向(む)く一(ひと)つありそのかた
　はらの三(み)つあまりの鶴(たづ)

黑龍(アムール)の沼地に屯(たむろ)したりしが阿久根の鶴(たづ)といま
　飛びわたる

國祝ぎ

新しき年のはじめにむらぎもの心しづまり國(くに)祝(ほ)がむとす

大(おほ)やまと日(ひ)の本(もと)つくに神(かむ)ながらいます　天皇(てんわう)に吉事(よごと)をまをす

ひむがしにあけわたりたるうなばらや今こそ
は照れ島の八十島

とよあしはらみづほのくにのこの力やむにや
まれぬこの力はや

皇軍のいきほひたぎり炎だちけがれたるもの
打ちてしやまむ

新年

大いなる勝のいくさの新年のけふの心を充たしめたまへ

新しき年の光を浴びつつつぞゆくもかへるもここにつどへる

初春の空は寒きに瓶にさすうすくれなゐの石
楠の花

朝な夕なこひのみ止まず海こえし百萬のみ軍
の武運ながきを

戰線にはや雪降るを映畫にて幾たびか見て歸
り來われは

戰勝新年

たたかひに勝ちて兜の緒をしめし昔のわが軍
いまのわが軍

天皇の御下賜の御酒前線にごくりと飲みて年
ほぎわたる

富みたるは富をおもはず貧しきは貧しきままに年祝ぐけふぞ

空中より岳陽もゆるところ見ゆ洞庭の湖は右に接して

大き日はこの天地にひとつにて今こそのぼれわれを照らして

冬の泉

戦線に雪は降るとも大君のみことのままに豊けかるべし

つゆじもの降りたる野べに青々と生ふる草ありひた土の上

野のなかの丘を越えたるわれひとり冬の泉を
むすびて飲みつ

山茶花の散りたまりたる下かげにけふの吉き
日をしまし樂しむ

龍のひげ木下に群れて瑠璃色の玉を籠らすを
さな等のため

豐酒

百萬の皇軍ともに豐酒を飲みほす時ぞひかりかがよふ

朝日子ののぼれる海のたまゆらに島は光につつまれにけり

わが國の正しき力のびのびて東洋和同いま建
立す

大づつは鳴りこそわたれ新しき年のはじめの
この朝空に

いざ子ども世のさいはひは健かに豊酒を飲む
この一ときを

戰勝日本

いきほひは神いきほひとさはりなき勝ちたた
かひて年あけわたる

あまてらす日の本つくにのみ軍の全きがうへ
にさきはひたまへ

業房をいで來て遊ぶ今日の日をわが大君もゆるしたまへり

洞庭のみぎはの泥を行く部隊の兵と馬の脚大きく映る

島山はさやけしと見る見るうちにあかねかがよふその白雪に

皇軍

勝いくさ心に占めて靜かなる洋のごとくに年
あけにけり

一高の學生にて旅順の陷落をまのあたり見き
けふの幸福

年のはに心しづかに愛でにけりくれなゐ深く
梅のにほふを

つつましく年を祝ぐとも消極の心ゆるみを國
民はせず

國こぞり新しき年祝ぐけふぞまづみ軍を祝ぎ
たてまつる

山茶花

落葉せる高槻ひと樹ゆふぐれの空に見ゆるを
尊むごとし

山茶花の白きを愛づるこの園にわれを怖れぬ
山鳥のこゑ

いのちさへ顧みなくに征く友の武運(ぶうん)ながきをこひのみて居り

大いなる國のいきほひの渦(うづ)なかに君がいのちも見えなくなりぬ

かたばみの青々(あをあを)とせる一鉢(ひとはち)を日向(ひなた)におきて歳(とし)をむかふる

梅

新しく年たちにけりくれなゐの梅を身ぢかく
に置きて年祝ぐ

軍事便手にとり持ちて讀むときに一たびは眼
とぢつつおもふ

南京が陥りてより一とせを經たる今夜の樂鳴りわたる

遞信の機關現地へ伸び伸びて戰ひの香を嗅ぐがごとしも

六時には來むといひたる友は來ず老の體を疲れしむるを

風

たけたかきゆづり葉の木に冬つかぜ吹き來し
時に諸葉ふるへぬ

ときのまに空をうつろふ冬風はわが眞上なる
槻の樹を過ぐ

たえまなく風の吹きしく一時を落葉のなかを
靴にて歩く

冬山をつたはりて來る風のおとこの谷あひに
しづかになりぬ

かさなりて落葉の深き冬やまにわが入りて行
くとほき風音

雑歌抄

ただひとり歩きて來(きた)るアッリッチ大使にむかひわれ脱帽(だつばう)す

一月五日明治神宮内苑

うづみ火のかたはらに吾悲しめど凡(およ)そびとの悲しみならず

ゆふまぐれ小さくなりて殘りたる熾をあはれ
におもふことあり

餅のうへにふける青黴の聚落を庖丁をもて吾
けづりけり

寒の夜はいまだあさきに洟はWinckelmannのうへ
におちたり

灰のなかに五つあまりの炭火ありあかあかと
してこもれど見えず

家いでて街に來しかばこのゆふべ追儺はをさ
なき子等がしつつらむ

杉はらに降りける斑雪かなしみと歩きて居れ
ば深しはだれは

降りしける雪てりかへすあまつ日をまともに受けて佇むわれは

みちのくの山形あがたの山中を行くおもひして歩きつつあり

チロールをわが行きしとき雪山の寒施行見つつ谷をくだりき

ほしいままにわが物として拾(ひろ)ひたる濱(はま)の白貝(しろがひ)
汝(なれ)に見しめむ

われ等にありては「寫生」彼にありては「意志の放出」「寫生」の語は善し

はりつめし甕(かめ)の氷(こほり)をかへりみずこの夜(よ)ごろ魚(うを)
は生きつつゐむか

紅梅の咲きのさかりの過ぎし頃はじめて鉢を
外に出(いだ)すよ

坂の上にあかがね色の雲のむれ動きそむれば
下びは明(あか)し

ひとり寝のベットの上にこの朝け追儺(つゐな)の豆は
ころがりて居り

内親王御生誕

サイレンの響きてつたふ御しらせを天の御聲
とよろこびかはす

内親王の生れたまひたるよろこびのとよみは
空にひびきて止まず

雛まつるけふの佳き日にひめの宮生れたまひ
たり瑞の御しるし

サイレンの空つたはれる聖き音わが子等躍り
あがらしめたり

み民われここに謹しみ言擧げむ國生ますこゑ
御子生ます聲

英譯萬葉集竟宴

豊酒はためらはず飲め樂しかる今日のゆふべのこの一時を

四月七日東京會館

竟宴のゆふべとなりておのづから心ゆたけし戀遂げしごと

大人(うし)たちのきほひたまへる後(うしろ)より心つつしみ
吾もあゆみき

饗宴(きやうえん)のあかりの下(もと)に吾等つどふ馬酔木(あしび)の花も
そこににほひて

萬葉(まんえふ)の古き歌らよ大洋(おほうみ)を越えたる國に今こそ
は染(し)め

ヒットラー總統五十回誕辰 四月廿日

エーベルト政府に向ひて進軍を企てたりし彼
は若しも

ミユンヘンに吾居りし時アドルフ・ヒットラー
は青年三十四歳

メーメルを軍港とすと火のごとき結語残して
彼はかへりぬ

五十回の誕辰をむかふるヒットラー多分夫人
は居らぬなるべし

いきほひに乗りたるかなとたはやすく彼の英
雄は言ひしことなし

作歌其折々

鹽斷ちてこやる童を時をりにのぞきに來つつ
心しづめ居り

風つよく衢を吹きてゆくところをわれは，晝寢す
その風のおと

ヴァチカノの鐘のひびきは現なるわれの臥處にしばらく聞こゆ　三月十二日ピオ十二世

傘もたず歩みてゐたる街上にわが濡れしきさらぎ二十日の雨

遠き懸案小學兒童の告げ口をナチ政策は根絶せんとす

マルクスが profunda melancholia をうつたへし書簡（しよかん）
殘りき老身（らうしん）彼は

きぞの夜の雨が朝けに雪になり晝すぐるまで
降りてつもらず

をさな兒は鹽（しほ）を斷（た）たれて臥しをれど時々（ときどき）ほが
らかに笑（わら）ふ聲する

テロリスト上海にありてその彈に命おとせる
を史的と謂はむ

十九日陳錄廿一日李國杰いのち死したり空し
とおもふな

未來よりひびきて來るものの音の如しといひて
かなしむ吾は

南より窓を鳴らして明日の日もなま暖かく風ふくらむか

少年兵潘浠生は家はなれ十二歳にてここに戦死す

三月二十九日武寧陥つ

春雨は霧のごとくに降りそめて夜の外套を幽かに濡らす

下の部屋より掃除の音すみなぎりし塵出でゆくをおもひつつ居り

歐羅巴の國の動きを雜(さつ)然(ぜん)と心のうへに置きて晝(ひる)寢(い)ぬ

春(はる)の夜(よ)の午前三時に眼(め)をあきてわれの體(からだ)の和(なご)むことあり

眼の前に映りそめたる南昌の炎を見つつまたたきもせず

突如として聞こゆ新南群島を臺灣總督府の管轄とせり

睡より醒めむとしつつあかつきの其時ごとに雀鳴くこゑ

廬山牯嶺の陣も陥ちたり逃げたるは三十二歳の指揮官楊遇春

十九日午前四時共同租界にてテロリスト團揚氏を襲ふ　揚其肴氏

夜にして山の上よりこがらしの過ぎぬるがごと過ぎてかへらず　悼中村孝

青羊齒

青羊齒のひいで秀でし形態に「平衡」のさま見えむとす

擬寶珠の芽は鉾形にのび立ちてけふの夕方あたら葉開かむ

とほざかる鴉のこゑも未だくらき朝々ごとに
聞くにはあらず

をさな子が癒えむとしつつ鹽味を少しづつ食ふ時にはなりぬ

入學のしらせ受けたる長男をよろこびこよひ
洋食くへり

青羊歯のいきほひづきて伸びゆくを顧みがて
に一日庭見ず

時たまに部屋をいで來て山羊歯のひいでてそ
よぐ傍に吾居り

春の雨朝けより降り山羊歯はことごと濡れて
にほふ色はや

多胡

多胡の碑の古りたる文字を見るにだにおほどかにして心樂しも

四月十六日

きその夜の曇りのそきし上野に芽ぶかむとしてにほひだつ山

はるかなる天の中処に右榛名ひだり妙義の山
も見るべく

木の芽ふく低山なみのあひにこそ多胡の入野
は見るべかりけれ

ふる國の春を見しむとわが友はゲエトル端に
て眼をみちびく

低山のあひだに見ゆる谷ほそくなりゆくさまもわれの身に沁む

この山に泉なきこと談らふを聞きつつ居りて從ひ行くも

低山の峯のまじはり稀ならずこの古國のいにしへおもほゆ

金井澤のはざまにくだり行かむとぞ蘭おほくして香ある山ゆく

赤松を運ぶ馬等のあへぎ居るはざまの道はいまだ新し

褐炭の小さき坑が一つ見え二つ見えつつ谷は開けむ

日曜

午後二時半大川の泥あらはるるころを來りて
心虚しも

四月二十三日

東より雲のうごきの疾くなりて川しもなべて
水銀のいろ

傍看してわれは過ぎ居り太鼓店革店いく軒か
軒を並べつ

南より風の吹きしくしく曇り日に聖天町をひとり
し行くも

山谷堀に橋がならびて掛りけり既に珍らなる
世界のごとし

靖國神社大祭

若葉森あかるくなりし今日の日に悲しみて一萬の兵銃ささぐ　四月二十四日

靖國の神垣の外に身を寄せて額づくときに聲さへ出でず

かしこきやすめらみことは御立して新らしき
數萬の神呼びたまふ　四月二十五日

新聞に遺族アパートの寫眞あり老も穉も禱を
さゝげて

サイレンの鳴りひゞくとき一分間街上にても
歩みをとゞむ

日記より

近々と廬山の霧のうごき來るその疾き霧いまだ見はてぬ

首都いでし汪兆銘の存在をおもひ出すがごとくに傳ふる

わが子等と共に飯くふ時にすら諧謔ひとつ言はむともせず

こもりにし家居より出づ山隈に通草の花の散りしけるころ

信陽より西南方に應山といふところあり軍うごき始む

浮沼池

三瓶山の野にこもりたるこの沼を一たび見つつ
二たびを見む

五月五日

かつてわれ疑ひたりし山の沼にけふは來りて
心しづまる

菱のことをコツトイカケといひ慣らし稚らが
採るいまの現に

人麿が國府をいでて佐比賣山の原に誰とか廬
せりけむ

夏葉黄がいろくれなゐにむらがりて生ふるを
見れば古へ思ほゆ

鴨山

佐比賣山その高原と鴨山と人かよひけむこと
をおもはむ

安濃より邑智へ越ゆる槇原の山の岨よりふり
さけにけり

いつよりか人の往来(ゆきき)の道たえて水あふるるを
くだりて行くも

鴨山をけふわが見れば一昨年(をととし)に相見(あひみ)しよりも
青くなりつる

鴨山を二たび見つつ我心ふゆるが如しひとに
言はなくに

佐比賣野

佐比賣野は生ふる蕨の數しれずひくくして蕨ほほけつつあり

五月七日

いろいろの鳥が音のする裾野にて雲雀幾つか中空のぼる

あひ呼ばふ牛の長鳴き淺山のかげにも聞こゆ
芽ぶく淺山

うちつづきあさ黄と芽ぶく高原の鳥啼く時に
あひにけるかも

白頭翁むらがり生ふる佐比賣野を二たび過ぎり
わが歩みけり

布野

出雲路をとほり來りて山靑きふたつの墓に今ぞぬかづく

五月八日

窓したの山がはに鳴く河鹿らを現かとおもひ否かとおもふ

こまごまと昔の遣しし物の見れば眼鏡おぼろにわれは悲しゑ

夜をこめて布野のはざまに鳴く蛙曉がたは稀にし鳴くも

石垣のうちに平安のありといふことぞ悲しき布野を行きつつ

五月九日

赤名越えて布野のはざまに藤なみのながき心
をとどめむとする

山のたをり廻りて來れば目下に二つならびし
奥津城が見ゆ

かぎりなき木の芽もえつつ春ふけしひとつの
山にのぼりてくだる

近作雜歌

市なかに人富みしかばしろたへの椿のはなに鵯啼くも

目のまへの甍のうへに春の雨さむく降るころをひとかへりゆく

小林(をばやし)の芽ぶくを見れば悲しみて逼(せま)らむとする
ものならなくに

數メートル前におつる敵彈(てきだん)の水しぶきあはれ
心にわれ怖(おそ)れしむ

捕はれし熊劔東の徒といへど維新前後の吾(わ)が
模倣のみ

四月二十七日中村憲吉全集慰労並に中村孝君
追悼會席上

布野(ふの)の峽(かひ)ましておもほゆ風おほき春ふけぬれ
ば心よわりて

大日本歌人協會より授賞せられたる橋本德壽
君におくる一首

たましひは流らふるものぞ天(あめ)ゆくや地(つち)ゆくやな
べて止(とど)まらなくに

露伴翁塵鶴の銘を示したまふかかる静けさも
吾は保ちつ　五月二十五日

出羽ケ嶽引退をすることに極め廻るべき處に
吾はまはりぬ　五月二十六日出羽海春日野挨拶

五台山に吹雪するところ吾れ見たり心は痛し
この時のまは　五月三十日

車房よりあふるるがごと朝な朝な勤むる人の競ひ見るべく

春逝く三首

わが庭にかすかなる草の咲き散るをかへり見ざるに春行かむとす

不凡にただの不思議と我軍のこの勇猛を思ひて過ぐな

深大寺

深大寺に湧ける泉のゆたけきを我見に來たり
立ちて見てをり

五月三十一日

かくまでに無盡水にて湧きくるををとめ繼つ
にならばあはれむ

水草のあまねき池にゐる鯉のしづまりたるは
眠りけるらし

うき草の間に見えたる白き鯉あはれねむりぬ
まだ明るきに

無患樹の黒き木の實を外隱しに幾つか入れて
われ去らむとす

節忌

二月四日
於發行所

あやしくも底びえがすとおもふころ歌會に行かむ時ちかづきぬ

一とせに一日をここに集へども君を見しひと幾人もゐず

ひる過ぎて頭（かしら）のいたみ強けれどわれは歌會に
しづまりて居り

赤彦忌　三月廿一日 於發行所

茂吉われやうやく老いて麥酒（ビール）さへこのごろ飲
まずあはれと思へ

霜柱やうやく絶えて春の來しけふの日(ひ)なかに
君を語りつ

年每(としのは)におもふみ墓にあららぎの實の落つるこ
ろ我は行かむか、

左千夫忌　七月二日 於發行所

おきなさびいませるかなと師のきみを思ひて
をりし頃ししのばゆ

口ひげの延びたまひたるおもかげも吾より若
くすでになります

淺草のみ寺にちかく餅くひし君と千樫とわれ
しおもほゆ

姫あやめ

和辻博士の新邸の庭は夫人丹誠のひめあやめ群生して青氈を敷きたるが如し卽事數首

おほどかに樂しき君がさ庭かな姫あやめはな
限りも知らに

しかすがに姫あやめぐさあはれにて夕づかなくに萎まむとする

おりたちて今こそ歩め庭をおほふこまかき花を君は愛てつつ

しづかなる君が家居は夕月夜露ふる頃しましておもほゆ

銃後

三年以來「銃後」といへる日本語が時のま置かず
脈うちきたる

大きなるこのたたかひの火けむりに浄められ
たる國土涯見ず

靖國の神のやしろに立ちのぼるうづ御光にわれは申さむ

泥すすむ軍馬の列が映畫より消えゆきし後涙いづるかな

こころみに思へぎりぎりの處なりともルーター網ごときに負けて何せむぞ

記念日を迎ふ

この力つらぬき透す國民とさだめられたるを
誰か疑ふ

二とせの國のこぞりをかへり見に今こそは見
めそのいきほひを

なまぬるきことをな言ひそ國こぞるひとつ火
焔の立ちのぼるとき

哈爾哈より海南島にわたりたる戰線をわが神
明は見たまふ

聖きいのち何にかかへむあめつちにむかひて
吾は呼ばむとぞする

七月二十日暁

午前四時過ぎたるときにあな寂し茅蜩のこゑ
はじめて聞こゆ

あかつきの蟬の寂しきひとつごゑこだはり居
りて眼を開くわれは

わが庭の椎にしあれや朝の蟬ちかづき來つつ
みじかく鳴くも

くらやみと過ぎし都會のあかつきに雀啼けば
はや蟬は聞こえず

うなじより流れし汗をありありとひとりごつ
さへ面はゆきもの

こゑ

みづみづし若きいのちを國興（おこ）るほのほの中に
捧（ささ）げたてまつる

おほきみのみ民とともに手（た）づさへて聖（きよ）き叫（さけ）び
をあぐる民ぞも

相こもりしわが妻をおきいでてはや二年(ふたとせ)
の山は青しも

おほいなる動きのすすみ明(あき)らけく退轉(しりぞ)かむと
するものと思ふな

いにしへに嘗て聞こえぬ物のこゑひむがし亞(あ)
細亞(じあ)に聞こえ来りぬ

歌碑行

いただきに寂しくたてる歌碑見むと藏王の山
を息あへぎのぼる

山腹の三本楢といふところ水湧きいでて古へ
ゆ今に

平ぐらの高牧に來てあかときの水飲み居れば
雲はしづみぬ

月山のやまの斑の見ゆるころこの高原を馬わ
たる見ゆ

さやかなる山の曉ゆくときに蟆子ぞまつはる
おそろしきまで

水の湧く平(たひら)がありて柔(やはら)かき草の生(お)ふるを暫(しばら)く
踏みぬ

この山にのぼれる人の幾たりは仙人澤(せんにんざは)のさ霧
にまよふ

低草(ひくくさ)をこもらしめたる水湧(わ)けり小(ち)さき砂地(すなぢ)も
近くにありて

藏王にのぼらむとする道にわかれて峩々温泉に行く人のあり

湧きいでてたまれる水のこもり處に蟇の蝌蚪生は安けし

むら山のうねりか青なる眞中に藏王のやまは皚くそびえぬ

七月八日歌碑を見むとて藏王山に登る同行岡本信二郎、河野與一、河野多麻、結城哀草果、高橋四郎兵衛の諸氏

歌碑のまへにわれは來りて時のまは言ぞ絶え
たるあはれ高山や

わが歌碑のたてる藏王につひにのぼりけふの
一日をながく思はむ

一冬を雪にうもるる吾が歌碑が春の光に會へらくおもほゆ

この山に寂しくたてるわが歌碑よ月あかき夜をわれはおもはむ

みちのくの藏王の山に消のこれる雪を食ひたり沁みとほるまで

藏王の赤はだかなる峰にゐて雁戸の山は直に青しも

雪消えしのちに藏王の太陽がはぐくみたりし駒草のはな

いにしへは神にせまりてこの山に上りしかども遊びせなくに

この山にまうせん苔を遊びしは三十年の過去
となりたり

北にこごる雲をあふぎてわれの見し鳥海山は
をとめのごとし

さんげ坂くだりくだりて汗にあゆ友のうしろ
に吾は黙して

明神嶽明星嶽

山鳩は悲(かな)しき鳥か相呼(あひよ)ばふ聲はかたみに透(とほ)る
ことなく

七月三十一日

明神(みやうじん)の山腹(やまはら)にして富士が根のいただきさやに
見えたるあはれ

平(たひら)より雲わき上(のぼ)りこの谷の青きうねりを斑(はだら)に
なすも

東谿(ひがしだに)白く霧(きら)ひて相模(さがむ)の國(くに)のまほらに見ゆるも
の無し

赤蜻蛉(あかあきつ)よわよわとして飛びかへる山はまだき
に秋たつらしも

曉のさ霧にぬるるさだめにていまこそにほへ
あめの花原

東より押して迫れる白雲は峯に觸りつつうづ
まきのぼる

ちかづきて見れば高萱あらあらし年の行事と
此處に火ともす

山荘日記

七月二十二日より山荘にこもりて折に觸れ詠み棄てたる歌若干首あり便に從うて玆に録す

怠らむとわれ思はねど山中に來りて生を靜かならしむ

わがためにここに起臥し炊せし媼身まかりて
日々に悲しも

劇しかりし上海戰の新聞が赭くなりて障子に
貼られつつあり

鉛筆にて赤き標をわがつけし北支事變の新聞
のこる

クレーギー大使は兩手の拳をば接して立てり
この表情よ　日英會談

敬虔なるこの體様を彼は先づ具備せしめたり
見すぐし難し

咄嗟なる有田大臣の手の位置はクレーギーよ
りも稍流動す

一國の外交戰といふといへども人（ひと）客觀的には
斯くも見ゆるも

射干（ひあふぎ）の花のふふまむ頃となり山ほととぎすい
まだ聞こえず

ひとつ谷に圓かなる月かがやきて雷（らい）の音（おと）する
雲ちかづくも

七月三十一日

峡の門にいまだも低き月かげはおどろの露を
照らしてゐたり

八月一日

東京にありて聞かざるもの聞きぬ月のひかり
に夜鳥のこゑす

すわりゐて圓かなる月われ見たり杉の木間を
かたむきゆくを

日の光眼（め）に沁（し）むまでに強くして草生（くさふ）のうへに
螇蚸（ばった）しづまる

八月二日

さ夜ふけてより峽（かひ）の門（と）はあかるめりわが居（を）る
此處（ここ）はおほにくらきに

谷の中に虹（にじ）いつくしく立ちたれどありふれし
物の如くになりつ

八月三日

茅蜩の鳴きやむ頃に松蟬の聲の如きが交はり
て鳴く

わが娘時々に新約のことをいふ善き言の葉を
聞くはうれしも

ノモンハンの戰のさま氣を屛めて思ふことあ
りさだかならねど

この庭に土龍もたげし黒土が朝々にあり淋し
きものぞ

日英の會談の記事日々讀みて亢ぶるこころ靜
めにしづむ

八月四日

「彼等は女に汚されぬ者なり潔きものなり」とは
女の側より見しか

八月五日

山中の家居に居りて新聞を待ちこがるるを獨語ちつつ

春天の大成潔みまかりてはや二週間過ぎむとしたり　八月七日

蟋蟀が杉の下びに鳴きはじむ月いづるまへの暗やみにして　八月八日

かくばかり竹の落葉のつもりたる山もとの道
しばし通れる

八月十日

鵯鳥は朝々來鳴く谷遠く鳴きつつ來るこゑの
戀しさ

ほととぎす向つ谷間にこもり鳴く曉起に聞き
て飽かなく

白き百合(ゆり)をはりとなりて黄なる百合(ゆり)ひらかむ
とする頃をこもれる　　八月十二日

よわよわと咲きはじめたる射干(ひあふぎ)のいろかなし
きはただ一日(ひとひ)のみ

十三日箱根の山の上空(じやうくう)を三機編隊の音とどろ
くも　　八月十三日

山鳩は晴れわたりたる山峡(やまかひ)の今日の午前(ひるまへ)啼く
こゑ聞こゆ

八月十五日

白桃(しろもも)の大きなるものわが部屋に並(なら)べつつあり
清(すが)しといひて

みづみづし新妻(にひづま)が手を手(た)にぎりて君は南へ大(おほ)
洋(うみ)わたる

八月十七日爲小谷君新婚

續山莊日記

朝の雷北の空より聞こえ來るそのとき鳥の聲も聞こえず
八月十九日大橋君歸る

朝いまだくらき空より飛行機の音ぞきこゆる急げるものか
八月二十日

茅蜩はあかつきに鳴き時おけば幾たびか鳴く
日のくるるまで　八月二十一日

眼の青き蜻蛉を一つ捕へたり稚きものら暫し
樂しむ

元の使者斬られて六百六十年の秋口にしてそ
の墓洗ふ

杉の樹に巣くへる鳥を襲ひたる蛇ひとつ見つ
山にし居れば

ゆふぐれに近づくころは新聞の來るを待ちわ
ぶ戀るがごとく

雲低くうごくを見つつけふひと日露伴先生と
ただ吾とのみ

八月二十二、二十三日

幾たびか眼高手低の境界に入るを惜しむと言ひたまふなり

君とふたりのみなる大き幸をわれいだきつつ象棋負け居り

いにしへの佛の世より巧者等は以問爲敎の實を傳へし

あはれ豊けき露伴先生のみそばにて支那女詩
人に執着をする

ここに來て二たびわれの相むかふ箱根の山に
かがやける月

八月二十九日

あきらけき月の光に見ゆるものの青き馬追薄を
歩く

起臥して日を經るままにかく明き月を見ること稀々にして

月の夜に吾起き居れば蟲がねの數限りなきごとく聞こゆる

片かはにあらぶる浪の形せる雲たむろして圓かなる月

飛行機ニッポン太平洋を横断す勝鬨(かちどき)よりも強(つよ)
きに似たり　八月三十日

圓(まど)かなる月はのぼりて山(やま)の上(へ)に群がりてゐる
石さへ明(あか)し

あまのはら月の光の隈なしとわが立つなべに
雁の行く見ゆ

このときに六全大會を報じ來る新勢に動悸を
感ず　八月三十一日

新しく造らるる成語に眼をとどむ「睦隣政道」
「複雜怪奇」

かすかなる書を讀みつつ山の上に興亞奉公の
一日暮れたり　九月一日

われよりも七歳あまり年若き彼の英雄は行く手をいそぐ

バルシヤガル平地戦線の砲の音わが耳朶にくひ入る如し

谷を隔てて應召おくるこゑきこゆ狭霧のたちし朝まだきより

九月二日

九月一日二日獨逸ポーランド國境戰爭のみじかき記事あり

飛行機の音谺（こだま）する一時（ひととき）をここのはざまの道にわれ立つ

序幕戰すでに溷濁（こんだく）し居りて一九一四年の華（はなや）かさなき

九月四日

滿洲國牡丹江よりの軍事便蝮の群を捕へしことのみ

あゝ西部戰線に猛烈の動き、なし合意のInterruptusか

雲ひくく垂れて樹立に入るとき、に睡眠は吾を逼めてやまずも　九月八日

ただならぬ國と國とのなかからひを山の川原に
思ふあはれさ

鳥獸も然れ希臘の神々はいま死なむとする人
を見捨つ

さびしさの嚴しきものを身に染めて起臥すと
きに吾弱々し

九月九日

山のべの朝とゆふぐれ二たびは僅かばかりの
飯を炊ぎぬ

ノモンハンに續く國境戰鬪を氣にかけながら
眠るよひよひ

九月九日十日

月かげの無きこのごろの宵闇に鳴く蟲のこゑ
あまたになりつ

この雲の上をし行くか強き雨そそげる時に飛
行機きこゆ

第二次の西部戰線に猛烈の勢ひなきをわれも
おもへる

やうやくに秋寂びむとすとおもほゆる此處の
木立に雨蛙鳴く

思ひきり海軍戰もあるべしと中立國の人々おもはむ

ウィルヘルム二世の寫眞ドールンにて撮りたるものの老いしおもかげ

山なかに日ねもす雨の降るを見てわれひとり此處に居りがてなくに

豆もやし蒸せるがごとき感動よ歐洲戰を背景
とする

葛に似し薄むらさきの秋花の咲きそむるまで
籠りけるはや

九月十二日

秋のいろ山の膚に見えそめし今日のゆふぐれ
山をくだらむ

小吟

九月十五日の東郷モロトフ會談を偶然となす
人ありやなし　九月十六日

私の感情に過ぎずと思ふらむさもあらばあれ
齒痛の去りしに似たり

やうやくにわが口ひげは白けれど參同契を知ることもなし

九月十八日訪幸田先生

ここを獨りわれは歩める瓜生刀自銅像の前に靜かなるベンチあり

九月三十日

淺草のみ寺をこめて一目なる平らなる市街かなと見おろす

川獺の水くぐるときこゑあげし童子等と吾と干係は無く

群集は足音たてて昇降す八層の家のおのおのの階

丈高き茶の木に白き花咲きて人どよめきを感じつつあり

感情をいふ暇（いとま）なし空（くう）氣（き）切る對（たい）地（ち）戰（せん）鬪（とう）の時のま
のおと　十月一日

夜（よる）ふかく應募歌あまた讀みとほし鹿兒島縣へ
旅立たむとす　十月二日

雜歌控

賀壽

わが父の兄の治右衛門伯父こそは九十二歲の
老に入りけれ

大君(おほきみ)もほめたまひたる伯父(をぢ)のきみはいのち長
くて國の寶ぞ

甥茂吉五十八歳にしてよろこびぬ九十二歳の
伯父治右衞門を

餅あまたくひ飽かぬてふ伯父のきみを今(いま)壽老(じゆらう)
人(じん)とわれ申しける

金瓶が金谷のころに生れたる伯父をおもへば
年ふりにけり

讀賣新聞兎の寫眞を示して一首を題せよとい
ふ即ち一首（一月十七日）

兎如して言擧せざる國なれど今年はつひの勝
鬨あげむ

汪洋島連太郎翁古稀賀（三月十一日）

わたつみのよせ來る浪はをやみなく君をよろこぶこゝろをつたふる

石橋二三郎翁古稀賀（三月十一日）、

あまそそる越（こし）の白山（しらやま）うちあふぎながきみ齢（よはひ）ほがざらめやも

菊地幽芳翁古稀記念「幽芳歌集」序（三月八日）

秋さればもみぢのあかきふか渓（だに）に幽（いう）芳（はう）渓（けい）の名をぞとどむる

勝どきのとどろくときに菊の花ふるふてふみ
歌たたへざらめや

菊つくる翁（おきな）とこそはおもひしか人麿（ひとまろ）も知らぬ
菊の歌あり

海龜（うみがめ）が卵を生むを見つけられ泣く涙さへ歌に
よみます

萬葉のひびきつたひし歌いくつ老のみいのち
いよよすがしも

短歌新聞百號祝歌（四月十五日）

百號になりたるといふこと聞けば默し居りと
も默すにあらず

柳田が短歌新聞か短歌新聞が柳田かといふこ
とは吾も云はむぞ

神保孝太郎博士墓參（五月三十一日）

ゆく春のひと日のゆふべいそぎ來て君がおく
つきをわれ去りあへず

高安國世君新婚賀

つまを得て家ごもりするときよりぞ和よろこびははじまりにける

子規忌（九月二十三日）

あきらけき道の上に立つ幾たりを君は見いで
て喜びけむを

太平洋

新しくみなぎる興亞のいきほひは太平洋のう
へにし及ぶ

大うみの浪を越ゆるとためらはぬこの力こそ
美しかりけれ

わたつみの奥を渡りて人は見む天をうつ浪あ
ぶらなす凪

かぎりなき力伸びむと我が同胞の船ぞわたら
ふこの大海を

大き艦かずをつらねてゆく時ぞわたつみの浪
幸ひを呼ぶ

海ゆかば水づくかばねとことほぎて太平洋は
砲ぞとどろく

変雲をはり

かくのごとき歌ひあげつゝ柿本の人麿に及ばずと
つひに嘆きし

卷末記

本集には、昭和十二年（四一八首）、昭和十三年（三二九首）、昭和十四年（三六八首）に作つた短歌合せて一、一一五首を收めた。私のものとしては最近の制作にかかつてゐる。

この「寒雲」は、發行の順序からいへば私の第三歌集であるが、大正十四年に、「つゆじも」といふ歌集を發行せむとして、古今書院主橋本福松氏と相談して、印刷の組みに著手したほどであつたが、その頃の歌には、年代的に空隙があり、手帳に未完成で書とどめたものなどが可なり多いので、それを整理しようといふと、時間がかかつて當時の私の生活狀態では奈何ともし難かつた。併しそれを整理して「つゆじも」を出すつもりでゐたため、その實

行が出來ぬうち徒らに歳月がたつて今日に及んでしまつた。友人がいふに、その纏まるのを待つてゐてはいつまでも埒が明かぬから、反對に新しい歌の方から出して行つたならどうであらうか。そこで私はその説に從つて、先づ新しい方の歌を纏めることにした。さうしてこの「寒雲」が私の第三歌集になつたわけである。

私の第二歌集「あらたま」の發行は、大正十年一月であつたから、それから算へると、この「寒雲」の發行は、二十年目に當つてゐる。そのあひだ、同情ある友人等は歌集の發行を期待してくれられたので、さういふ事情からしても、今回の歌集は、内容を精選して少しくは讀むに堪ふべきもののみを收錄するのが、最も自然な遣り方だとおもつたのであつたところが、中途から方鍼をかへて、即興即事の歌、註文に應じた歌、手紙ハガキの端に書いた歌等に至るまで、見つかつたものは全部收錄することにしてしまつたから、

「赤光」、「あらたま」發行當時のごとく、新歌集を以て世に問ふといふやうな氣持とは全く緣の遠きものになつた。そこで私に同情ある讀者諸氏に、この中から幾らか讀むに足るもの若干首を拾ひつつ鑑賞してもらふといふことを私は希ふのである。

本集の製作時に於ける私の生活は、別にかはりなく、作歌はやはり業餘のすさびといふことになるわけである。ただ昭和十二年に支那事變が起り、私は事變に感動した歌をいちはやく作つてゐるのを異なつた點としてもかまはぬやうである。なほ私はこの「寒雲」發行以後、昭和十一年昭和十年といふ具合に溯つて、一年に一冊ぐらゐづつの新歌集を出すつもりであるから、ねがはくは一瞥せられたい。

本集出版に際し、岡麓、土屋文明、橋本福松、佐藤佐太郎、山口茂吉諸氏の厚き助力に對して深き感謝の念をささげる。

昭和十五年二月廿六日印刷
昭和十五年三月一日第一刷
昭和十五年四月廿日第二刷

歌集寒雲

定價參圓

著者 齋藤茂吉

東京市神田區駿河臺二丁目十番地
發行者 橋本福松

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者 白井赫太郎

發行所 東京市神田區駿河臺二丁目十番地
古今書院
振替口座東京三五三四〇番
電話神田(25)三七五三番

精興社印刷